

V 中世の遺構と遺物

金井遺跡B区からは、中世の鑄造跡と集落跡、墓壇群を検出した。最も注目すべき点は広範囲にわたって発見された鑄造跡である。鑄造施設は、いくつかの地点に分かれて検出された。しかも地形や場所によって作業内容が異なり生産品に違いがあることが窺える。検出した遺構は鉄や銅を溶かした溶解炉、梵鐘・仏像・磬・獸脚・容器などの仏具用品の鑄型や鍋・羽釜・鞆先・容器・鉄瓶などの日用品の鑄型を伴う鑄造土塊、粘土採掘跡、鑄造関連施設などさまざまである。また、道具を修理したと見られる鍛冶遺構や小型の炭焼き窯跡も検出した。

遺物は、鑄造関連遺物として、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口を検出した。鉄塊には原料となる鉄鉄と鑄損じ品が見られる。また、銅滓以外に銅製品の破片や銅塊も検出された。羽口は大口径の溶解炉羽口と小型の溶解炉の羽口と見られるものや小口径の鍛冶炉羽口も検出した。炉壁、鉄滓、鑄型は多量、多種にわたり、このほか鑄物生産に使用されていた道具として鉄製箆、ハタまわし、へら、金桶、三叉状土製品(サル)、半球状土製品なども出土した。陶磁器は青磁をはじめ白磁、常滑、渥美、瀬戸・美濃、備前等の搬入土器と在地産の壺・内耳鍋・鉢・土師質皿等を検出した。

遺跡が広範囲であることから便宜的に第1～7区に分割し、1区から順次検出された遺構と遺物の事実関係について述べる。



航空写真(西側から)



第105図 中世の遺構全体図

1 第1区の遺構と遺物

本区は金井遺跡B区の調査区のなかでも東側にあたり、比較的平坦な地形である。標高30.7m。南から北にかけてわずかながら傾斜している。1区のほぼ中央に存在する不整形の大きな土壌が第1号土壌群である。周辺に鋳造関連の付属施設として第1～10号土壌が存在する。第1号土壌群内には第1・2号の2箇所の鋳込み跡を検出した。この2箇所は新旧関係が捉えられ二時期にわたって鋳造が行われていたことを窺わせる。第1号鋳込み跡からは鋳造型を大量に出土した。また、第2号鋳込み跡からは羽釜や容器、そして、掣先と考えられる鋳型を出土した。この第2号鋳込み跡を埋め整地した作業面に第1号鋳込み跡が存在する。出土鋳型からみて第1号土壌群は日用製品の生産場であることが考えられる。

掘立柱建物跡は第1号土壌群の周辺から第14～18号の5棟を確認した。このうち、第15号は南側と西側に庇をもつ3間×4間の建物である。また、本区は溝によって土地の区画をもち、南側に規模の大きな第4号溝跡が東西に走る。その北には「L」字状に第2号溝、さらに北側には第5号溝が南北に走る。これらの溝に区画された中に5棟の第14～18号掘立柱建物跡を確認した。第14・15号と第17・18号掘立柱建物跡はそれぞれ建物方向の軸を同じにしていることから関連を捉えられる。また、第15号掘立柱建物跡は2間×3間の身舎に西と南側に庇をもつ大きな建物である。第18号掘立柱建物跡も2間×2間の大きな建物で東側の第5号溝と平行して建てられている。またそれぞれに第3・4号井戸跡がみられ、建物跡・井戸跡・溝跡の関係を探る上で良好な資料であるが、鋳造遺構との関連は検討を要する。このほか、土壌、ビット等を確認した。

出土遺物は第1号土壌群からは鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等の鋳造遺物を検出した。年代を知る手掛かりとして土壌掘り方内から凌ぎ連弁の龍泉窯系青磁碗を検出。さらに、鋳造型の形態も古いことが窺える。概ね13世紀中葉と考えられる。また、井戸跡から多くの土器を検出した。井戸枠の柱材が残る第1号井戸跡からは確認段階で瀝美の甕を検出した。覆土中からは在地の甕・内耳鍋・鉢・土師質皿・火鉢と共に瀬戸の平碗や縁釉小皿、常滑の片口鉢や甕を検出した。第3号井戸跡からは「永享十二年」の記年名をもつ板碑を上層から検出。さらに、覆土中から碗・おしき・曲物などの多くの木製品と、在地産の内耳鍋・鉢を検出した。井戸からは鋳造時期の遺物とそれよりも新しい14世紀末から15世紀前半の遺物を検出した。

第1号土壌群は、金井遺跡B区において最初に調査を開始した鋳造遺構である。この時点ではまだ鋳造遺構としての認識がなく、製鉄炉の意識で調査を開始した。このため、炉の基部を南側の狭い先端部分と考え、北側に大きく広がる掘り込みが廃滓場と捉えた。事実、覆土中からは、炉壁、鉄滓等の遺物と焼土粒子・ブロック、炭化粒子・ブロックが混じり製鉄遺構としての様相をしていた。調査は遺跡全体に配った12mの大グリッドとは別に本遺構だけを包む1mグリッドを設定した。遺構の主軸に合わせ南から北へA～L、東から西へ1～8とし南東隅のグリッドがそのグリッドの呼称となる。こうして調査は進められたが、東側の斜面部の確認調査で梵鐘座の鋳型を発見し、同じ頃、第1号土壌群の南先端で鋳造型を検出した。この時はじめて、製鉄遺構ではなく、鋳造遺構、鋳造遺跡であることを認識した。



第106图 第1区遺構配置図

(1) 鋳造跡

a 第1鋳造遺構群

調査区の東側にあたるP・Q-6・7区の位置で検出された。北に伸びる舌状台地の先端部にあたるが、わずかに北側に傾斜するもののまだ平坦な場所である。

本遺構群は、鋳造作業場として造られた大型の不整形な第1号鋳造土壇と土壇内に検出された2箇所の鋳込み場(第1・2号鋳込み跡)で構成されていた。周辺には鋳造関連土壇として短冊型の第1・4号土壇や南側に方形の第8号土壇、不整形円形が連続して溝状になる第7・9・10号土壇が検出された。また、東側に第17・18号掘立柱建物跡、南東側に第3号井戸跡、第14・15・16号掘立柱建物跡を検出した。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽目を検出し、総重量は64704gであった。このうち鋳型は全体の64%を占め40462gである。鋳型の種類は鍋と釜があり、それぞれ34.2%と62.8%の割合である。

遺構

第1号鋳造土壇(第107図～108図)

形態は南北方向に長い大型の不整形をしている。規模は長さ10.76m、南側の幅は狭く1.80m程であるが、北に向けて徐々に幅を広げ最大幅4.50mにまで広がる。深さは掘り方に凹凸をもつもののほぼ50cm前後である。

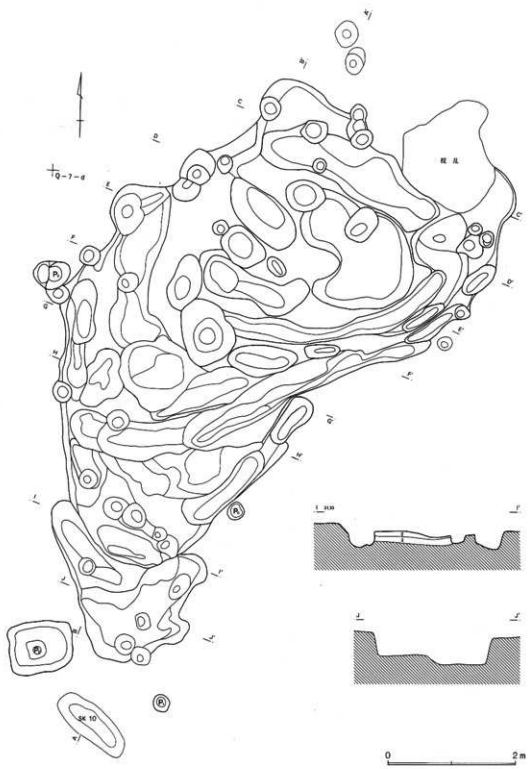
土壇は地山のローム面で確認できた。確認面から炭化物や焼土粒子、炉壁・滓等の鋳造遺物を含んだややしまりのない暗茶褐色土(第1層)で覆われていた。5～10cm程下げたところでローム粒子・ブロックを主体とした張り床面(第3層)を確認した。この面が第1作業面にあると判断。床面はほぼ平坦で、南側先端には鋳鑄型を出土する第1号鋳込み跡が伴う。鋳込み跡の北側左右と南側左右に柱穴を検出した。P1・P2・P3・P7である。やや台形状の配置だが本遺構に伴う柱穴と判断でき上屋の存在が考えられる。

さらに、第1作業面の貼床を掘り下げると部分的ではあるがしまりをもつ褐色土(第4層)を確認した。この面が第2作業面にあると考えられ、これに伴う第2号鋳込み跡を中央やや南寄りで検出した。

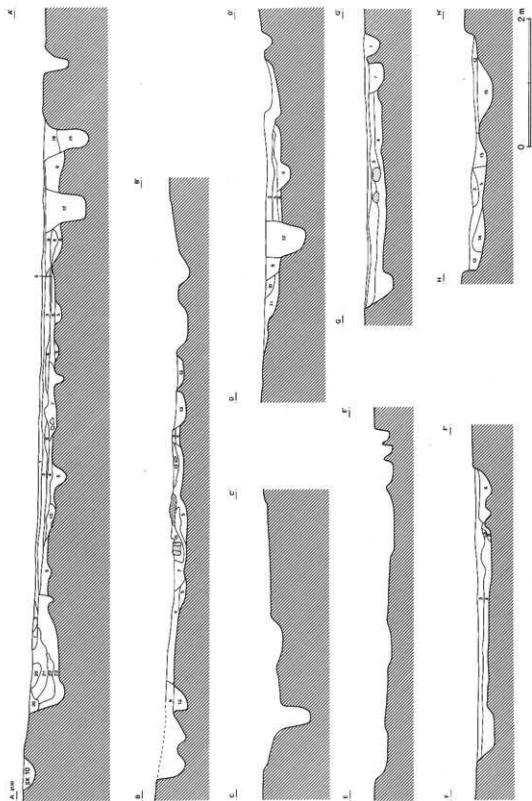
掘り方は、底面の中心部が土壇状に掘り下げられ凹凸し、中心から左右の側壁に向けて緩やかな弧を描くように溝状の掘り込みを幾重にももつ。全体に焼土・炭化粒子を含むきめのやや細かい黒褐色土(第5層)で埋め戻されていた。このような掘り方埋土は、防湿的役割をもっていたものと考えられる。

第1号鋳込み跡(第109～110図)

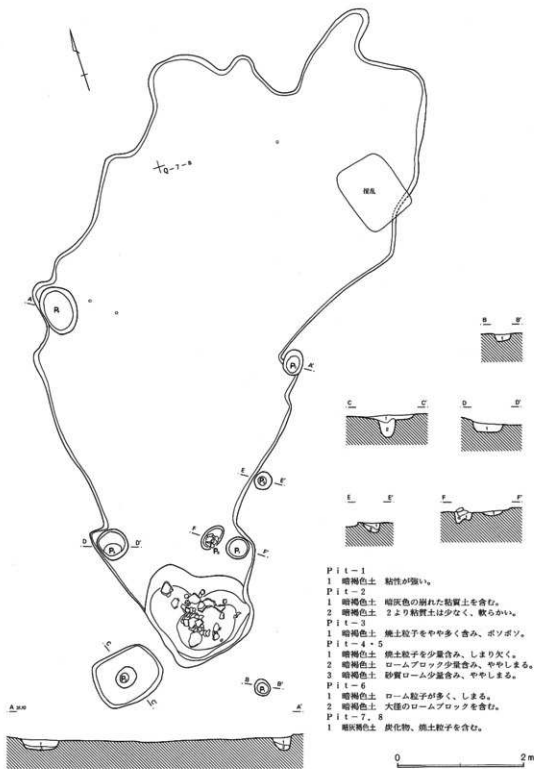
第1号鋳造土壇内の南側先端部で検出した。第1作業面から掘り込まれ土壇状をしている。形態は三角形をしる。規模は長さ1.40m、幅1.75m、深さ0.55mである。断面観察によると、第23層は鋳込み掘り方の埋め土であり、ロームブロックを多く含む若干の焼土・炭化粒子を混在させしまり硬い。また第20・21・22層は数個体の鋳鑄型片を含み、砂が多く混じる。この砂は中子砂の可能性が考えられる。出土遺物は12～19までの鋳鑄型である。



第107図 第1鋳造遺構群全体図(1)

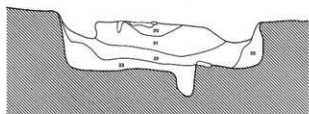
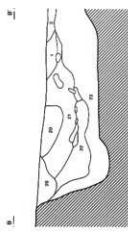
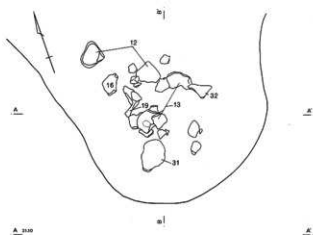


第108圖 第1鈣造遺構群全体圖(2)

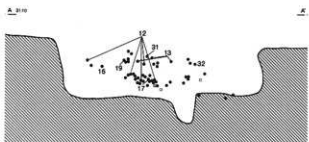
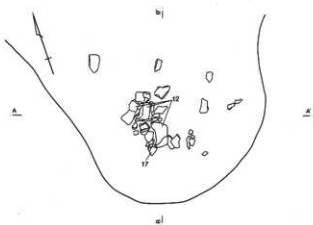


- Pit-1
 1 暗褐色土 粘性が強い。
 Pit-2
 1 暗褐色土 暗灰色の崩れた粘質土を含む。
 2 暗褐色土 2より粘質土は少なく、軟らかい。
 Pit-3
 1 暗褐色土 焼土粒子をやや多く含む、ボソボソ。
 Pit-4-5
 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む、しまり欠く。
 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む、ややしまる。
 3 暗褐色土 砂質ローム少量含む、ややしまる。
 Pit-6
 1 暗褐色土 ローム粒子が多く、しまる。
 2 暗褐色土 大径のロームブロックを含む。
 Pit-7, 8
 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を含む。

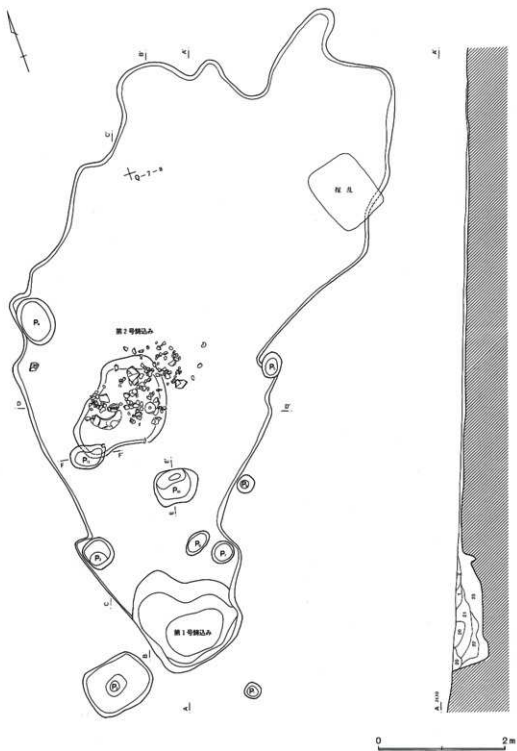
第109図 第1群第1号跡込み跡



- 20 暗褐色土 跡型の崩壊による堆積した砂、粘土層。
- 21 暗灰褐色土 跡型を多量に、砂、炭化粒子を少量含み、しまり欠く。
- 22 暗灰褐色土 2より砂・炭化物の含有度は低く、しまり欠く。
- 23 暗褐色土 跡込みの掘方。ロームブロック、焼土、炭化粒子少量含み、硬くしまる。



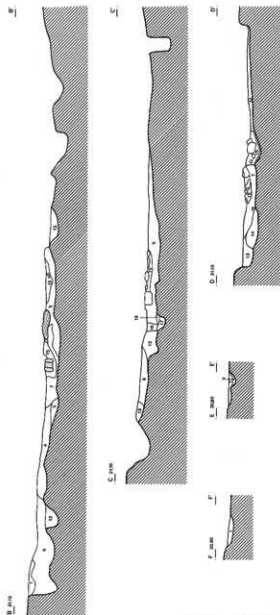
第110図 第1群第1号跡込み跡遺物出土状態



第111図 第1群第2号跡地跡(1)

第2号鋳込み跡 (第111~113図)

第1号鋳造土壌の第2作業面のほぼ中央部で検出した。上面から炉壁、鉄滓、石、鋳型等の鋳造遺物が多く出土し直下から茄子形をした土塊を検出した。規模は長軸1.72、幅1.30、深さ0.20m程である。断面観察によると第13層はロームブロック、焼土粒子を含みしまっている。第14層はしまりなく砂を含む。さらに、鋳型片を多く含む第15層は砂と焼土ブロックを主体としている。このことは第1号鋳込み同様に中子砂の可能性が考えられる。出土遺物は、鋳型と炉壁・羽口・滓等が同一の高さから集中して出土している。鋳型には釜、容器が認められた。また第15層に埋もれた状態で29の容器鋳型と33のドーナツ状をした鋳型を検出。



SS-01

- 1 暗茶褐色土 ややしまり欠き、炭化物、焼土粒子、炉壁、土層片等を含む。
- 2 黄褐色土 伊体の崩壊した山砂を多く含む。
- 3 褐色土 ローム・焼土・炭化・砂粒子を全体に含み、しまりもつ。作業面の粘床部分と考えられる。
- 4 褐色土 ローム・焼土・炭化・砂粒子を全体に含み、しまりもつ。
- 5 黒褐色土 ややきめ細かく、焼土・炭化粒子を含む。
- 6 黒褐色土 やや粗粒でしまり、粘性弱い。ローム・焼土・炭化粒子を含む。
- 7 黒褐色土 焼土・ローム粒子を微量含み、しまりない。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを主体。しまり、粘性強い。
- 9 暗褐色土 焼土・炭化粒子、焼土ブロックを含み、しまりやや弱い。
- 10 褐色土 ローム・焼土粒子、小砂利含み、しまり粗粒。
- 11 暗褐色土 ローム・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 12 褐色土 ローム粒子、ブロック (径1cm) を含み、しまりもつ (粘床風)。

第2号鋳込み跡

- 13 暗灰褐色土 崩れたロームブロック、焼土粒子を含み、しまる。
- 14 黒褐色土 ローム粒子、砂を含み、しまり欠く。
- 15 暗褐色土 砂、焼土ブロックを含む。
- 16 灰褐色土 ローム・焼土粒子を含み、しまり欠く。
- 17 灰褐色土 13に比べ、特にしまり欠く部分。
- 18 暗褐色土 きめやや粗粒。ローム粒子、ブロック (径1cm) を含み、砂粒子を混在。
- 19 黄褐色土 ロームブロック (径3~5cm) を多く含む。しまりやや強い。

第1号鋳込み跡

- 20 暗灰褐色土 鋳型の崩壊による堆積した砂、粘土層。
- 21 暗灰褐色土 鋳型を多量に、砂、炭化粒子を少量含み、しまり欠く。
- 22 暗灰褐色土 2より砂・炭化物の含有度は低く、しまり欠く。
- 23 暗褐色土 鋳込みの型方、ロームブロック、焼土、炭化粒子少量含み、硬くしまる。

Pit-10

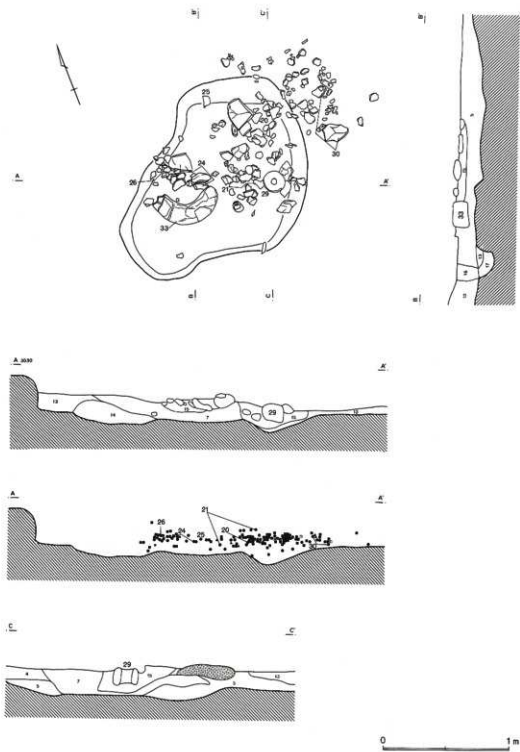
- 1 茶褐色土 砂質で砂を多量含む。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロックを含み、しまる。

Pit-11

- 1 茶褐色土 ローム、焼土ブロック、滓を多量含む。しまりやや欠く。

第112図 第1群第2号鋳込み跡(2)

0 2m

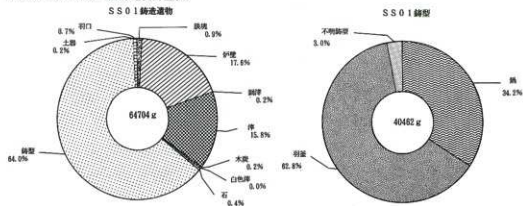


第113図 第1群第2号銅込み跡遺物出土状態



第114図 第1鋳造遺構群遺物分布図

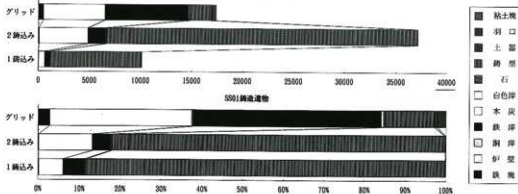
第4表 第1 鈷造構群遺物計量表



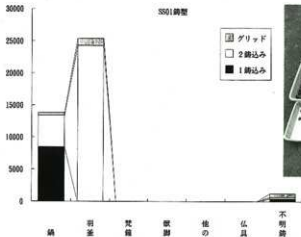
小番号	鉄塊	銅片	銅屑	銅	木炭	白色滓	石	鈷型	土器	羽口	粘土塊
1 跡込み	20	395	0	265	15	0	46	8916	0	15	0
2 跡込み	30	4783	60	1697	0	0	120	30410	5	89	0
グリッド	482	6037	55	8079	97	8	88	2631	128	389	0
総計	582	11415	115	10206	112	8	254	41467	133	472	0

小番号	鈷	羽茎	銅片	銅屑	他の鈷	仏具	不明鈷型	日用品小計	仏具小計	鈷型合計
1 跡込み	8465	0	0	0	0	0	451	8465	0	8916
2 跡込み	9845	24285	0	0	0	0	225	29230	0	29465
グリッド	450	1175	0	0	0	0	526	1555	0	2081
総計	13840	25410	0	0	0	0	1202	39250	0	40462

SS01 鈷造遺物



SS01 鈷型



遺物

鋳造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊582g、炉壁11415g、銅滓115g、鉄滓10206g、木炭112g、白色滓8g、石254g、鋳型41407g、土器133g、羽口472gを計量した。このうち鋳型は銅13840g、羽釜は25410gであった。

第1号鋳造土壌内では溶解炉跡を検出できなかったが、炉壁片も多く出土しており土壌内にあった可能性が考えられる。白色滓・銅滓が微量である。このことは本遺構が鉄を中心とした生産場所であったことを示唆する。

土器は、1・2が龍泉窯系青磁碗で鍋連弁である。いずれも掘り方め土から検出。3は白磁碗で周辺の柱穴内から出土している。また、4、5は在地の鉢と古代の須恵器破片であり、いずれも覆土中の混入と考えられる。6は砥石である。上面には幅0.6cm、長さ6cmの凹みがある。また、側面に径1cm、深さ0.6cmの凹みをもつ。

炉壁は、いずれも溶解炉の破片で拳ほどの大きさにこわれて検出した。7・8は大きい方の破片である。表面は溶解物が厚く付着し、径3～6mmの気泡痕を全面にもつ。色調は黒色で光沢をもつ。8には木炭痕と径1.7cmの鉄塊系遺物が付いている。裏面は還元されたため青褐色粘土となっている。器面は平坦で擦痕が見られることからバリ取りなどの砥石として再利用されたと考えられる。炉壁胎土には焼土粒子、白色粒子、径1cm程の小石、滓の破片を含み、スサの痕跡は認められない。また、還元された粘土層の中間に溶解物の付着が見られる。このことは、粘土で造られた溶解炉は、一度溶解に使用したときに高温であるため粘土が溶かされ薄くなる。再度利用する際にもう一度内側の溶解面に新しい粘土を張り込んで使用したものと考えられる。つまり、溶解炉は修復をして再利用されていると考えられる。

羽口は、いずれも小破片で炉壁との区別がしづらい。9・10は羽口である。外面は紫紅色の湯滓が付着する。炉壁と大きく違う点は内面に残された粘土の色が赤褐色であることと器肉が薄いこと、湯滓の付着が薄いことにある。羽口の特徴は大口径であること。9は推定径11.6cm、10は推定径16.8cmとなる。胎土はきめ細かく白色針状物質、砂粒、滓の小片を含む。

鉄滓は、3から5cmほどの大きさのものが標準的な大きさと考えられる。また重さも見た目より軽い。11の滓は大きさ6.4cm、重さ47.5gで大きい方である。黒色のガラス質で表面は光沢をもちやや滑らかである。断面を観察すると細かい白色の粒子が沢山見られる。これは、溶解炉の粘土中に含まれている白色の鉱物粒子と考えられ鉄の溶解温度でも溶けずに微粒状に留めているために滓の中に一緒になったものと考えられる。なお、本遺物は分析資料Na22である。

鋳型は、真土を使って造形をし型を作る(真土型)。造形後、鋳型内面を炭灰などで850～900度位で焼き固化してから常温にさまし、湯を流し込む壺型の方法によると考えられる。12～19は鍋鋳型である。20～25は釜と見られる。26～30は容器である。

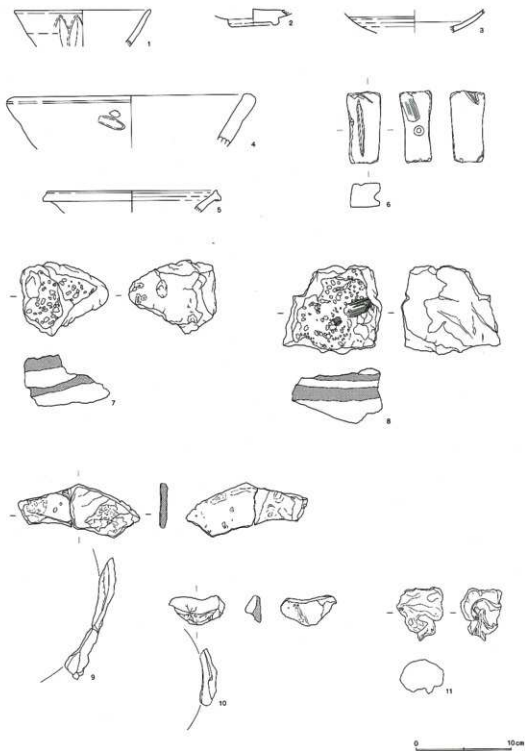
鍋鋳型は、基型(回し型)を回転させ鍋の外輪郭を作り出している。残存する部分は押さえの部分から幅木部、胴部にかけて約半分強である。底部および湯口部は欠損しており残存しない。寸法は鋳型全体径34.0cm、高さ20.8cm、厚さ5.1cmである。幅木の高さ2.0cm、幅2.0cm、口縁部長さ3.4cm、胴部長さ10.3cmである。形態は胴部わずかに開きながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は胴部と

の境に屈曲をもち、やや開き気味に直線的に立ち上がる。ここまでが製品部分にあたり鑄型面は還元され青灰色である。鑄型の輻木部分は受け口状に外へ開き丸みをもって立ち上がり、端部の押さえ部分へと移行する。鑄型面の製品部分および輻木部分には黒味の痕跡が見られる。外型の作りは、土型(母型)部分がありそれを基に荒真土、中真土、仕上げ真土を載せている。土型の胎土は、大きいもので径2.7cm程、小さいものは径0.7cmの石を含み、砂粒、鉄滓片、黒鉛化木炭片なども含む。また、細かいスサが多量に混入された土型層である。荒真土層は基型により成形され胎土は土型と似ている。小石、砂粒子、鉄滓片を含む。中真土層は、砂質できめ細かく鉄滓小片や白色の砂粒を含む。さらに、きめの細かな砂粒と白色の砂粒を含む厚さ3mm程の仕上げ真土層の順となる。色調は、土型層が茶褐色。荒真土層が褐色。中マネ層は赤褐色。仕上げマネ層は湯が流れたため還元され表面が灰色で放射状の細かいヒビ割れが生じている。その内側は、褐色で、中マネ層と接する部分は赤褐色の酸化色である。鑄型は、左右方向と上下方向にゆるい弧をえがき、中マネ層と仕上げマネ層は厚みが比較的均一に整えられている。これは、土型がかなりきれいに挽かれていたためかと考えられる。13は土型をかなり残存させ素焼きしたことが理解できる資料である。また、部分的ではあるが土型に荒・中・仕上げ真土の順で型引きされており製作技法を考える上できわめて重要な資料といえる。14は押さえの部分から輻木、口縁部にかけての鑄型片である。15~19も同様である。

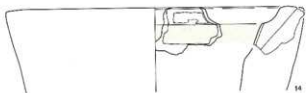
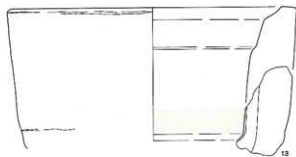
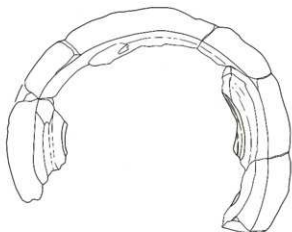
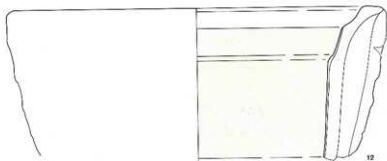
20~23は鍋にみられた土型がなく荒真土からの破片である。しかも、荒真土は非常に胎土が荒い。特に22は胴部破片で長く尻型と考えられる。また、23は口縁部と考えられるが内傾して径を狭める。器面は段をもち上から幅1.8cm、1.8cm、2.9cmであり、下の二段までが還元されている。釜もしくは羽釜鑄型の口型と考えられる。22は金属学的分析資料とした。側面4面と裏面が破面となる鑄型片である。胎土は、厚さ2.7cm程の石や鉄滓片、黒鉛化木炭片などを含み、細かいスサが多量に混入された母型層。厚さ9.5mm前後の鉄滓小片や有色の砂粒を含む砂質の中マネ層。さらに、白色で不透明な砂粒を半分以上含む厚さ3mm程の仕上げマネ層の順となる。色調は、母型層が茶褐色。中マネ層は上下方向に赤褐色部分と褐色部分に分かれる。仕上げマネ層は表面が灰色で放射状の細かいヒビ割れを生じている。その内側は、褐色で、中マネ層と接する部分は赤褐色の酸化色である。鑄型は、左右方向と上下方向にゆるい弧をえがき、中マネ層と仕上げマネ層は厚みが比較的均一に整えられている。これは、母型がかなりきれいに挽かれていたためかと考えられる。

24・25は鑄型とするにはやや形態が不明である。24は鑄型の中子を載せて支えるジョウと呼ばれる道具の破片と思われる。鑄型同様の粘土で作られている。「L」字状に基型で挽かれており、上面は平らで中子砂と思われるきめの細かな還元された砂粒が付着している。内面は基型の細かな条線が巡っている。破片であるため全体の形状は不明である。25は胎土・形態とも近似するが条面の形態がわずかに傾斜しており端部が立ち上がっている。

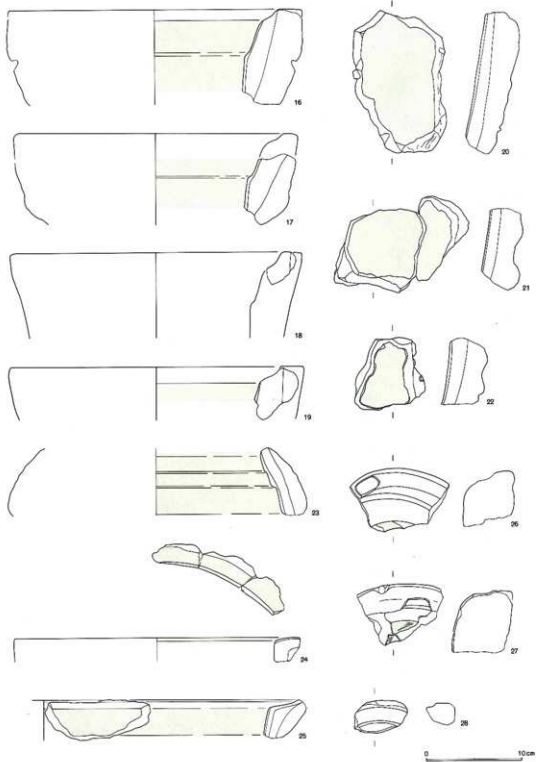
26~30は容器鑄型である。形態はドーナツ状に成型された土型を種に基型で中真土、仕上げ真土を載せている。押さえ部分は幅1.5cm、輻木の部分は押さえから4mm下がつて幅1.8cmである。製品部分は大きく開いた径10.1cmの口縁部から徐々に径をつぼめ径5.8cmの底部へと移行する。この部分は湯が流れ還元されている。土型の胎土は鑄型型の土型と類似し、径3.0cmの石を含み小石、鉄



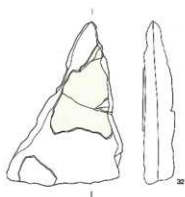
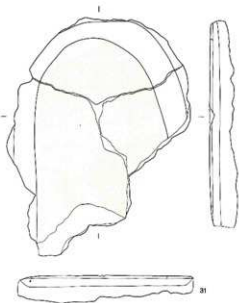
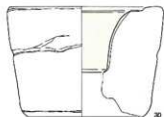
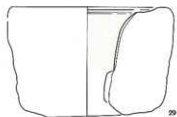
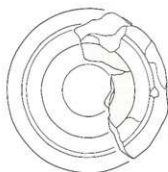
第115圖 第1 銅造遺構群出土遺物(1)



第116図 第1 铸造遺構群出土遺物(2)



第117圖 第1 鈔造遺構群出土遺物(3)



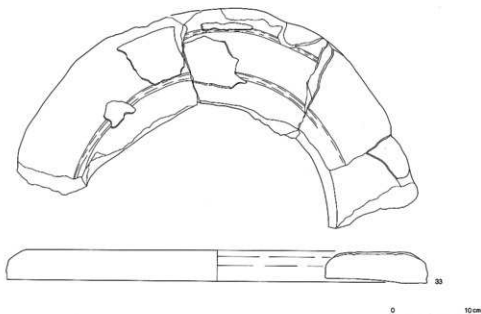
第118圖 第1 鑄造遺構群出土遺物(4)

滓片、白色粒子を含んでいる。その上に基型により荒・中・仕上げ真土を載せている。

31・32は不明鋳型としたが犂先鋳型の可能性が考えられる。31は「U」字型部分が残存し、全体の形態は不明である。作りは、まず平たい「U」字型の土型（荒真土）を基にしてその上に中真土をのせる。真土はおそらく棒状の木の道具（定規のような道具）で平らに成型される。さらに、その上に仕上げ真土をのせもう一度平らに成型し、型焼きをしたものと考えられる。部分的にクロミの痕跡がある。製品となる青灰色の還元部分は幅3.0cm内側でやはり「U」字状である。鋳型胎土は、土型部分が小石、鋳型片、鉄滓片、炭化・白色・焼土粒子を含み荒真土とも考えられる。中真土部分はきめ細かく砂粒子、白色粒子を含む。仕上げ真土はさらに細かく白色粒子が多く見られる。大きさは、残存長さ21.5cm、幅18.2cm、厚さ2.9cmである。おそらく本鋳型は上型と考えられ、幅3.0cmの赤褐色の部分は下型との合わせ部分と考えられる。製品は「U」字型をしていることから犂先の可能性を考えたい。製品の推定される大きさは還元された部分から、残存長さ19.0cm以上、残存幅14.3cmである。32の遺物も同様の鋳型破片と考えられる。

33は不明鋳型である。ドーナツ状をしており、ほぼ半分程残存している。推定径は外周で51.0cmと大きい。上面は平坦で両端に幅6mmと4mmの浅い凹みをもち、全体の幅は11.2cmである。木型で挽かれたものであるが種類を特定できない。梵鐘のジョウ部分か大釜の銜部分かとも考えられるが不明である。

道具は、三叉状土製品(サル)と半球状土製品が検出された。いずれも用途は鋳型を乾燥させる時に焼き炭を乗せる台として使用され、仕上げ真土で整えられた鋳型面を傷つけないようにした。36は第1号鋳込み跡から、34・35・38・39は第2号鋳込み跡から、37は第2号鋳込み跡の北側J-5

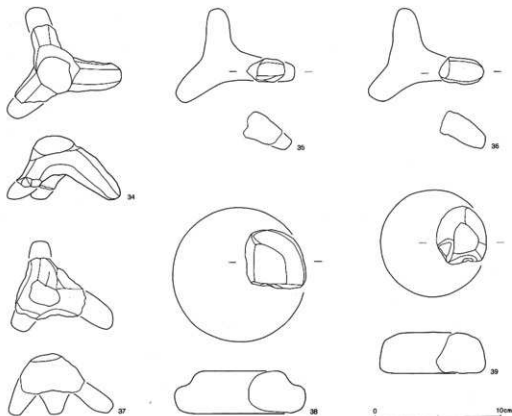


第119図 第1鋳造遺構群出土遺物(5)

グリッドからそれぞれ検出した。鍋・羽釜といった容器鋳型と一緒に出土することからも用途については理解できる。

三叉状土製品は粘土を素材とし砂粒子、鉄滓片を含み鋳型真土に似ている。棒状に丸めた粘土紐を「U」字型に曲げ対角線上に裾広がり長めの棒状粘土を貼り付ける。全体のバランスは1本がやや長く、上面は被熱され赤褐色土に変色しているのが特徴である。本遺構からは検出されていないが、大きさにもいろいろあり容器鋳型の大きさによって使い分けされたと考えられる。

半球状土製品は細かい砂質粘土を素材としている。形態は台形状をし途中に段をもち摘まみやすくしている。用途は不明であるが三叉状土製品と同様の可能性も考えられる。



第120図 第1 鋳造遺構群出土遺物(6)

第1群出土遺物観察表 (第115~120図)

図版	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗	14.4	3.8		I	A	緑灰色	10%	No33 椀15b	中国・龍泉
2	青磁碗	4.8	1.7		I	A	緑色	50%	No36 椀I	中国・龍泉
3	白磁碗		2.4		I	A	白灰色	10%	Q-6Pit20 椀Ⅳ	中国
4	鉢	24.0	5.5		AEG	B	褐色	10%	No26	中国 在地
5	長頸壺	18.0	2.3		BCD	A	黒灰色	10%	J-6-一括	南比企

第1群出土鑄造遺物觀察表 (第115~120図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
6	砥石	7.5	3.6	2.4	130		No31	石
7	炉壁	7.7	9.0	5.1	210		F-7	炉2
8	炉壁	9.1	9.7	5.3	370		No28	炉2
9	羽口	12.8	4.7	0.9	50	直径(11.6)	E-6Pit11	羽口
10	羽口	6.0	2.7	1.6	15	直径(16.8)	C-6	羽口
11	鉄滓	6.4	4.7	3.1	47.5		G-5 分析資料No22	滓1
12	鍋				4419	口径34.0 器高20.8	第1号鑄込みNo9, 12, 20, 25, 36	鑄型
13	鍋				2700	内径27.0 器高14.0	第1号鑄込みNo2, 3, 15	鑄型
14	鍋				85	口径26.6 器高8.8		鑄型
15	鍋				17	口径27.0 器高3.3	G-4	鑄型
16	鍋				710	口径26.0 器高9.9	第1号鑄込みNo11	鑄型
17	鍋				310	口径26.6 器高9.6	第1号鑄込みNo37	鑄型
18	鍋				25	口径27.0 器高9.0	一括	鑄型
19	鍋				120	口径26.0 器高5.6	第1号鑄込みNo6	鑄型
20	鍋	14.3	9.4	4.0	485		第2号鑄込みNo108	鑄型
21	鍋	8.9	12.6	4.0	375		第2号鑄込みNo72, 129	鑄型
22	鍋	7.4	7.3	4.1	197		分析資料No37	鑄型
23	羽釜				245	内径(22.0)器高7.0	第2号鑄込み	鑄型
24	羽釜				120	内径(27.0)器高2.4	第2号鑄込みNo121, 130	鑄型
25	羽釜	4.0	11.1	4.0	150	器高4.2	第2号鑄込みNo106	鑄型
26	容器	6.6	10.5	4.8	265		第2号鑄込みNo19	鑄型
27	容器	6.4	9.0	6.5	270		No231	鑄型
28	容器	3.4	5.5	2.2	26		第2号鑄込み	鑄型
29	容器				2950	内径14.6 器高11.5	第2号鑄込みNo17	鑄型
30	容器				1010	口径15.4 器高11.6	第2号鑄込みNo34, 110	鑄型
31	壺先	23.2	18.2	2.9	995		第1号鑄込みNo1	鑄型
32	壺先	17.0	11.8	3.4	450		第1号鑄込みNo14	鑄型
33	不明		11.2		16800	外径51.0 器高13.0	第2号鑄込みNo144	鑄型
34	三叉状土製品		7.9		85	高さ5.0	No29	土器
35	三叉状土製品		2.3		10		No29	土器
36	三叉状土製品		1.8		15		C-5一括	土器
37	三叉状土製品			1.4	60		J-5	土器
38	半球状土製品	4.5	4.6	3.2	65	直径(10.4)	No34	土器
39	半球状土製品	4.0	4.3	3.1	50	直径(8.4)	No35	土器

第5表 第1鑄造遺構群一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS01-SSK01	SS01	Q-7-a	不整形	10.76	1.80	0.50	N-34°-E
第1号鑄込み跡	1号炉	Q-6-i	三角形	1.40	1.75	0.55	
第2号鑄込み跡	2号炉	Q-6-h	楕円形	1.72	1.30	0.20	

(2) 掘立柱建物跡

本区から検出された中世の建物跡は第14号から第17号掘立柱建物跡である。第14・15号は1区の中央に位置し、第16・17号は北側にあたる。



第14号掘立柱建物跡 (第121図)

Q・R-6・7区に位置する。西側調査区の中央部にあたり、北側には第1号遺構群、第3号井戸跡、南側には第15号掘立柱建物跡が存在する。いずれも、中世の建物跡と考えられる。建物規模は2×3間の東西棟の建物で、桁行6.60m、梁行4.20mである。主軸方向はN-70°-Eである。

柱穴は円形をしており、規模は比較的小さく径0.26~0.46m、深さ34~54cmである。柱間寸法は規格制に乏しい。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏、壺、甕の小破片が検出されているが时期的なまとまりもなく、柱穴規模や構造から見て中世の建物と考えられる。



第15号掘立柱建物跡 (第122~123図)

Q-8・R-7・8区に位置する。西側調査区にあたり、北側に第14号掘立柱建物跡が存在する。周辺には規則的な並びがつかめないものの小規模な柱穴が多く検出され中世の居住域であったと考えられる。建物規模は身舎が2×3間の東西棟で、西側と南側の二方に庇がめぐる。桁行9.40m、梁行5.50mである。主軸方向はN-75°-Eである。

柱穴は円形をしており、P6・P12の底面には柱を支える板状の根石を伴う。柱穴規模は径0.32~0.52m、深さ18~52cmである。柱間寸法は身舎部分で桁行2.60m、梁行2.10mであり、桁行側の柱間の方が長いこ

とがわかる。庇は西側が1.60m、南側が1.20mと柱間の寸法が短い。また、身舎の側柱に対し中間柱列および庇の柱穴は掘り方の規模が小さくなる。

出土遺物は検出されていない。

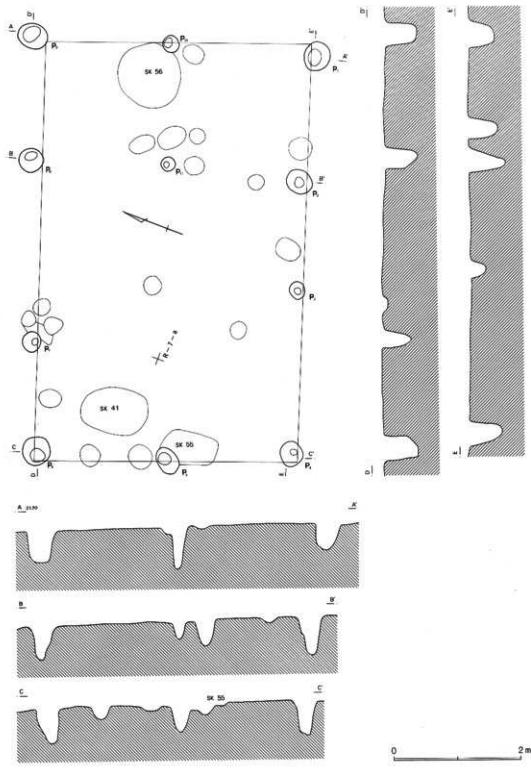
時期は中世と考えられる。



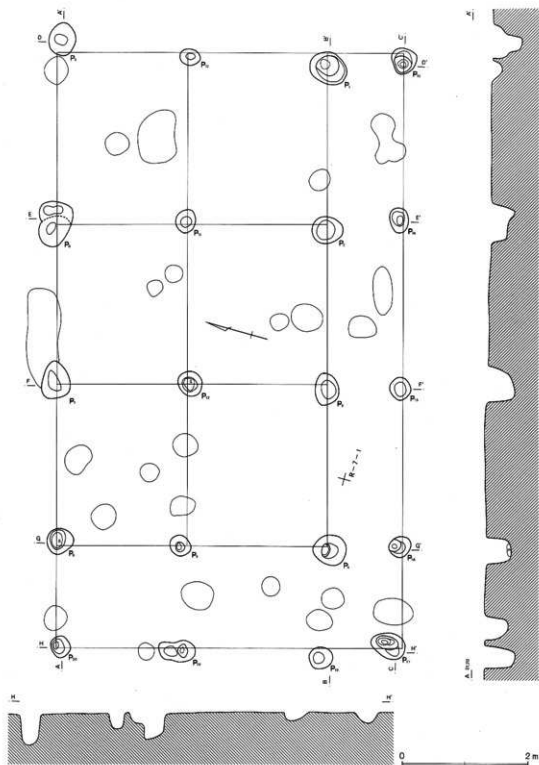
第16号掘立柱建物跡 (第124図)

R-8区に位置する。西側調査区にあたり、西側には第14・15号掘立柱建物跡が存在する。建物は、妻側に中間柱の検出されない1×3間の東西棟建物である。西側の桁行は3間で東側の桁行は2間と変則的で、規模は桁行が6.00m、梁行は4.20mである。主軸方向はN-45°-Eである。

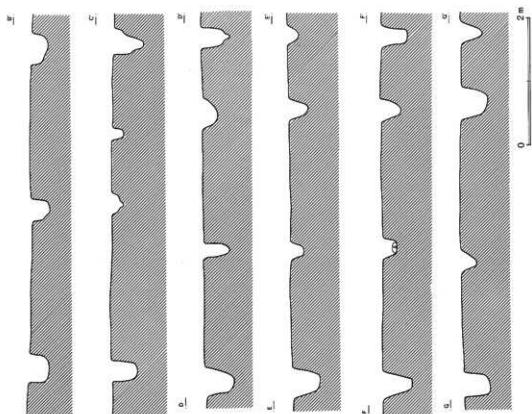
柱穴は円形をしており、比較的小さく径0.28~0.46m、深さ16~38cmである。柱間寸法は西側のP5・P6間の桁行が2.60m、P6・P7・P8間の桁行が1.70mであり、東側の桁行は3.00mである。



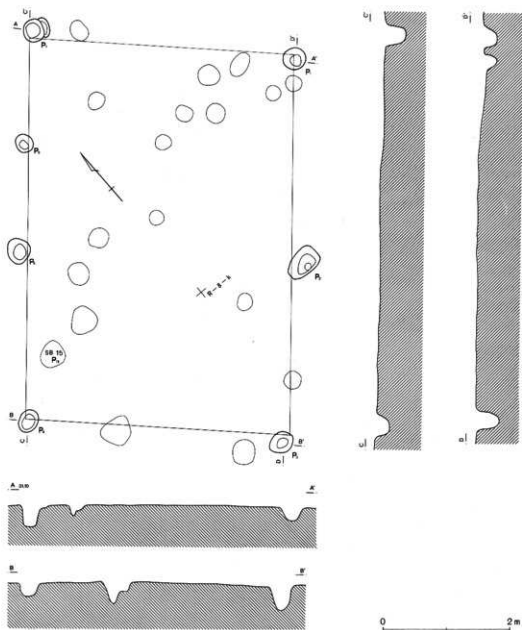
第121圖 第14号掘立柱建物跡



第122图 第15号掘立柱建物跡(1)



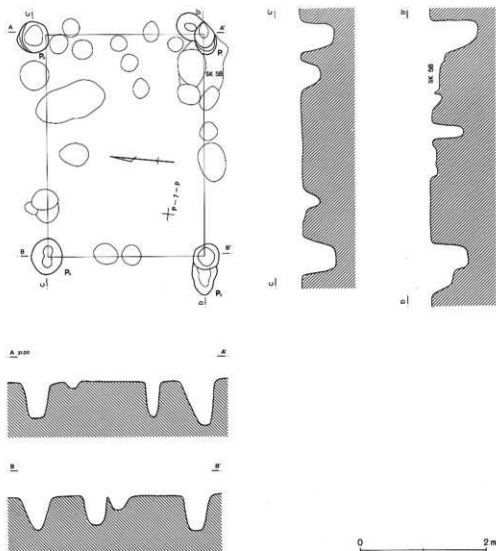
第123图 第15号掘立柱建物跡(2)



第124図 第16号掘立柱建物跡

桁行側の柱穴はやや不規則であるがP₂とP₃が対をなし、隅柱のP₁・P₃・P₄・P₂は、しっかりとした掘り込みをもち、ほぼ方形にならぶ。

出土遺物は検出されなかったが、時期は建物構造や柱穴の規模・覆土から中世と考えられる。



第125図 第17号掘立柱建物跡



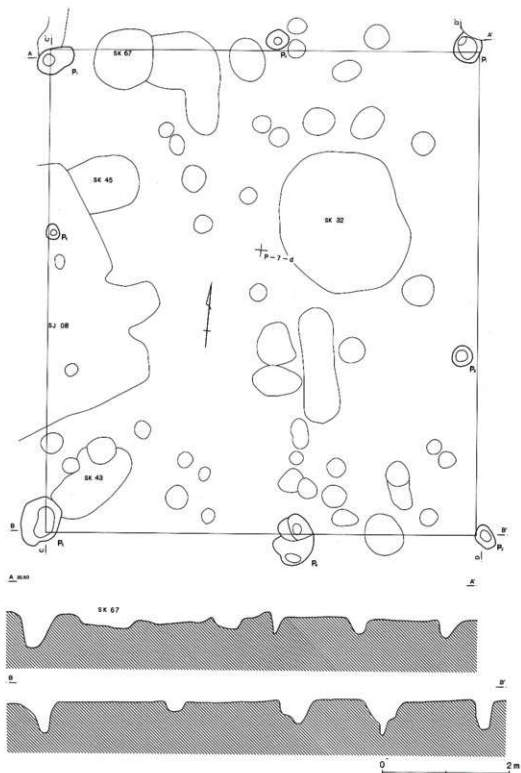
第17号掘立柱建物跡（第125図）

P-7区に位置する。西側調査区にあたり、北側にはほぼ建物方向を同じくした第18号掘立柱建物跡が検出された。周辺には規則的な並びが認められないものの小規模な柱穴が多く検出されこの場所が中世の居住区域として捉えられる。また、西側には第1鋳造遺構群が位置する。建物規模は1×1間の東西棟であり、桁行3.50m、梁行2.50mである。主軸方向はN-3'-Wである。

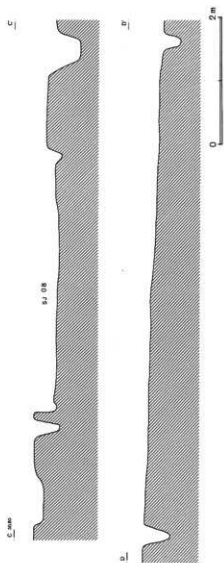
柱穴は円形をしており、規模は径0.41～0.57m、深さ53～70cmでありやや深い。

出土遺物は検出されなかった。

時期は中世と考えられる。



第126図 第18号掘立柱建物跡(1)



第127図 第18号掘立柱建物跡(2)



第18号掘立柱建物跡 (第126～127図)

O・P-7・8区に位置する。西側調査区にあたり、舌状に伸びる台地の北側縁辺部にあたる。南側には近接して第17号掘立柱建物跡が検出され、南西側には第1号遺構群が検出された。また、本建物の東側柱穴列に沿って第5号溝跡を検出し、さらに東側には第4号井戸跡を確認した。

西側中間柱のP6は、古代の第8号住居跡と重複関係にあった。建物規模は、2×2間の南北棟の建物である。桁行7.60m、梁行6.80mであり、主軸方向はN-6°-Wである。

柱穴は円形をしており、隅柱はやや大きいものの中間柱は小さい。規模は径0.25～0.70m、深さ15～56cmである。柱間寸法は桁行が2.80mと5.00m、梁行3.00mと3.80mであり変則的である。桁行側の柱穴は、対角線上に位置し不ぞろいであるが、梁行側の柱穴P₄・P₆は対をなしている。隅柱も掘り方はしっかりとしており方形の建て物としては、規模が大きい。

出土遺物は検出されなかった。

時期は中世と考えられる。

第6表 第1区掘立柱建物跡一覧表

新番号	旧番号	位置	重複遺構	間×間	桁行	梁行	主軸方向	時期
SB-14	18	Q-6,7 R-6,7	SK-12,28,50	2×3	6.60	4.20	N-70°-E	中世
15	10	R-7,8 Q-8		3×4	9.40	5.50	NL-75°-E	中世
16	24	R-8	SB-10	1×3	6.00	4.20	NL-45°-E	中世
17	25	P-7	SK-58	1×1	3.50	2.50	NL-3°-W	中世
18	26	Q-7,8 P-7,8	SJ-08 SK-49,76,100,106	2×2	7.60	6.80	N-6°-W	中世

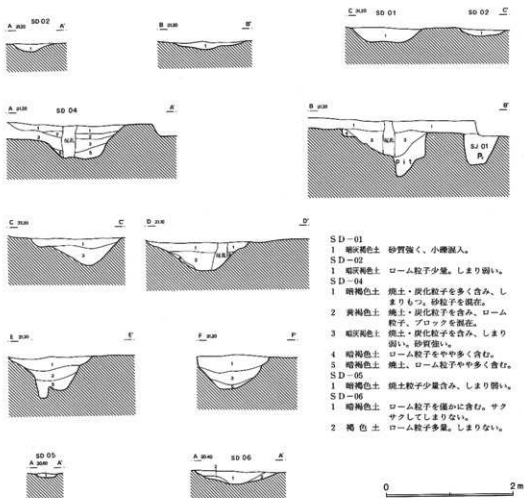


第128図 第1区の溝・井戸・土坑配置図

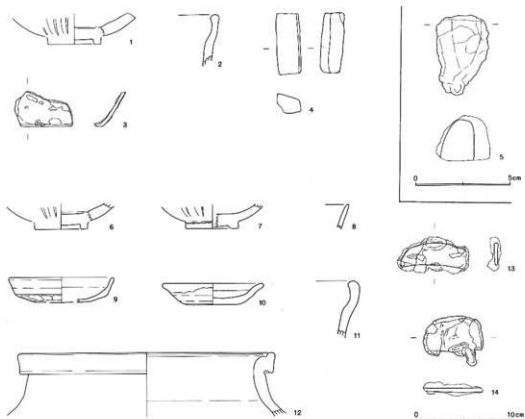
(3) 溝跡

本区からは第1～6号溝跡を検出した。このうち、第1号溝は近世以降の溝と考えられる。本区で検出された中世の溝は、調査区の南端に断面「V」字型の幅1.5m、深さ61cmの規模の大きな第4号溝跡とこの北側に平行して「L」字状に伸びる第2号溝跡、さらに、南北方向に走る第5号溝跡である。

遺物は第4号溝内の覆土中から第130図の1の青磁碗、2の在地産の内耳鍋、3の鉄鍋の底部破片等を検出した。第4号溝跡の東側覆土中からは6～14の遺物を検出した。6～7は青磁碗であり、9は淡褐色で白色針状物質を胎土中に含む手づくねである。10は底部に回転糸切りを残す15世紀前半の瀬戸灰釉小皿である。12は常滑系の甕である。13は鉄製鎌、14は鋳造品の破片と見られる。



第129図 第1区溝跡土層図



第130図 第1区溝跡出土遺物

第1区溝跡出土遺物観察表 (第130図)

図版	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗				I	A	茶褐色	5%	SD4 S-9 椀15b	中国・龍泉
2	内耳鍋		5.5		CDEG	B	褐色	5%	SD4 確認面	在地
6	青磁碗				I	A	茶褐色	5%	SD4 T-8-括 椀15b	中国・龍泉
7	青磁碗		2.5	(5.5)	I	A	緑褐色	20%	SD4 覆土 椀15b	中国・龍泉
8	青磁碗				I	A	緑色	5%	SD4 T-8-括 椀11~4	中国・龍泉
9	てづくね	11.0	2.6		ABCDF	B	淡褐色	20%	SD4 T-8-括	在地
10	灰胎小皿	10.2	2.3	6.0	BI	A	褐色	50%	SD4 覆土	瀬戸
11	内耳鍋		6.0		CDEG	C	黒灰色	5%	SD4 T-7	在地
12	壺	(27.0)	6.6		BDI	A	茶褐色	5%	SD4	常滑

第1区溝跡出土土器遺物観察表 (第130図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
3	鉄塊系遺物	3.6	5.7	0.4	46.2		SD4 分析資料№33	塊2
4	砥石	6.4	2.5	1.8	52		SD4 覆土	石
5	鉄塊系遺物	4.2	2.6	2.4	69		SD4	塊1
13	鉄塊系遺物	3.5	7.5	1.1	51		SD4 T-8	塊2
14	鉄塊系遺物	5.0	6.3	1.2	47		SD4	塊2

第7表 第1区溝一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位 置	長 さ	幅	深さ	主 軸 方 向	時 期
SD-01	SD-01	S-7~9 T-6,7	34.50	1.00	0.24	N-65°-E	近 世
02	02	R-6 S-6~8	47.50	1.30	0.13	N-75°-E	中 世
03	03	T-7,8	6.90	0.50	0.12	N-20°-W	
04	04	T-6~8	32.30	1.50	0.61	N-80°-E	中 世
05	17	O-8 P-8	18.50	0.80	0.04	N-5°-W	中 世
06	22	M-5 N-5,6	32.40	2.40	0.30	N-90°-E	近 世

(4) 井戸跡

金井遺跡B区では14基の井戸跡を検出した。このうち12基は中世の井戸跡と考えられる。中世の井戸跡は規模が大きく、特に第1号井戸跡は直径5.12mであり、深さも5.14mと非常に極めて深く掘り下げられていることがわかった。また、井戸跡の覆土中からは渥美・瀬戸美濃・常滑等の多くの陶器をはじめ舶載ものの青磁も見られる。さらに、在地の陶器や木製品も数多く出土している。このように、井戸跡からは、貴重かつ豊富な遺物の検出が見られた。

本区から検出された井戸跡は第1~4号である。いずれも、規模の大きな井戸跡であり、円形のロート状をしている。

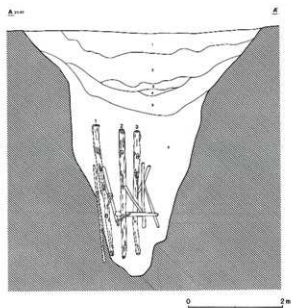
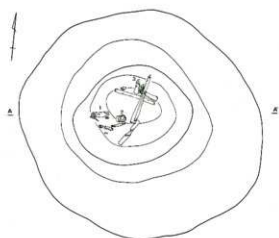
第1号井戸跡 (第131~133区)

T-7・8区に位置し、第1号掘立柱建物跡を壊して造られている。西側に第1号住居跡、北側に第1・2号溝跡、南側に第4号溝跡が東西に走りその中央に位置する。平面形態は円形をしており、断面は上部が錐鉢状をし、中位から徐々に先細りとなる。規模は長軸5.12m、短軸4.82m、深さ5.14mである。非常に大規模な井戸跡であった。覆土は6層に分かれ第1・2層は礫を多く含む。第3・4層は粘土を主体とし、第5層は地山の礫層が崩落して堆積している。第6層はやはり地山のローム土が崩落して堆積し、底面は礫層深く達し、一段深く掘り込まれた部分に水溜まりを形成している。この層中からは長さ2.80~3.00mの杭が打ち込まれた状態で検出され井戸枠が設けられていたことがわかる。

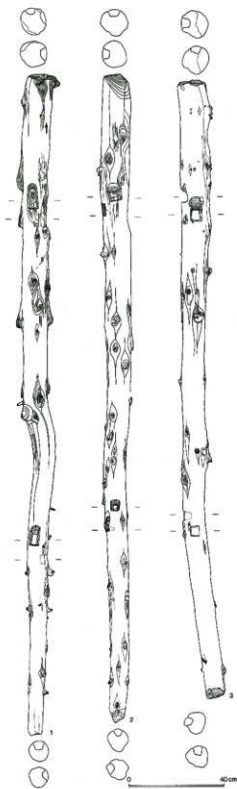
出土遺物は、搬入品では、渥美系の壺・瀬戸美濃系の平碗・常滑系の片口鉢が見られ、在地系のものでは、土師質皿・片口鉢・内耳鍋・甕が検出された。遺物の出土状況を見ると上層からは金井遺跡でも古い段階の遺物が含まれている。

8・9の渥美系の壺は口縁部のみの破片であるが、口唇部を大きく開き水平に伸びている。14は貼り付け高台の鉢である。また、下層から出土した遺物は常滑系の片口鉢・在地系の壺・火鉢を検出した。4~7は常滑系の片口鉢で、口唇部は平坦な面を持ち内外面に突出する。色調は赤茶褐色で整形は口縁部が横ナデ、体外外面が縦方向のヘラナデを施し内面は平滑である。6は内面に螺旋状の凹線が施されている。10.11は内耳鍋で内耳の取付く口縁部の湾曲は大きいが幅は短い。12は在地の北武蔵型甕で肩部に膨らみを持つ。17~20は土師質皿でロクロ成形され、底部は静止糸切りである。20は手づくね土器で器肉がやや厚く底部は丸底気味である。21.22は火鉢である。21は口縁部の外面に菊花文を施す。22は三足の脚が貼り付けて造り出されている。

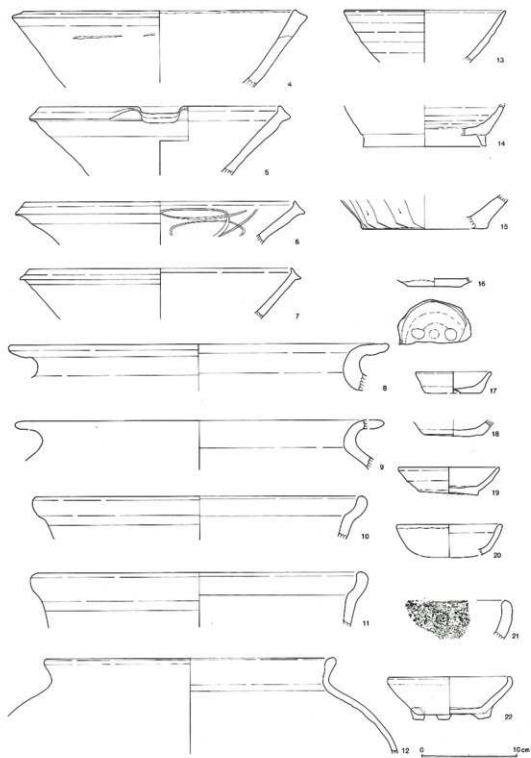
1~3は井戸枠に使用されていたと考えられる杭である。いずれも、自然木を利用し、枝の部分



- 1 灰褐色土 礫を含む。しまる。
- 2 緑灰色土 ローム粒子を含む。中から下位部分には礫を多量含む。ややしまり弱い。
- 3 暗茶褐色土 チョコレート色の粘質土。
- 4 暗褐色土 粘土。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量含む。しまりない。下方部分は、礫を多量含む。
- 6 茶褐色土 ローム崩壊土を主体。しまりない。

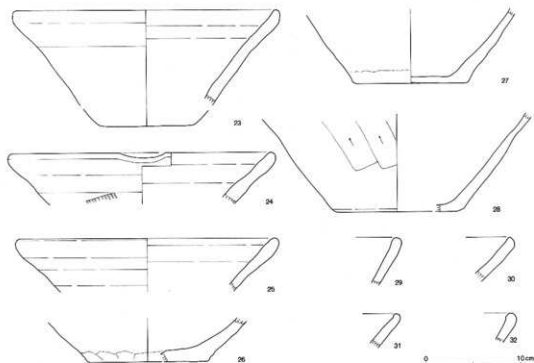


第131図 第1号井戸跡・出土遺物(1)



第132图 第1号井戸跡出土遺物(2)

を切り落としている。先端は面とりが施され尖っている。また、二面にやや段違いでほぞ穴があげられている。1は、全長2.77m、太さ12~6cmである。ほぞ穴は4ヶ所有り正面上のものは長さ10.5cm、幅4.5cm、深さ2.5cm、正面下のものは長さ8.5cm、幅4.0cm、深さ3.8cmである。2は、全長2.73m、太さ12~7cmである。ほぞ穴は4ヶ所有り正面上のものは長さ7.5cm、幅5.6cm、深さ2.8cm、正面下のものは長さ4.8cm、幅3.6cm、深さ3.0cmである。3は、全長2.58m、太さ13~8cmである。ほぞ穴は4ヶ所有り正面上のものは長さ10.0cm、幅4.8cm、深さ3.0cm、正面下のものは長さ4.4cm、幅3.6cm、深さ3.8cmである。



第133図 第1号井戸跡出土遺物(3)

第1号井戸跡出土遺物観察表 (第131~133図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
4	片口鉢	28.5	6.7		D	A	赤褐色	20%	下層	常滑
5	片口鉢	25.3	7.2		D	A	赤褐色	20%	覆土下層	常滑
6	片口鉢	28.7	4.5		D I	A	茶褐色	10%	覆土上層	常滑
7	片口鉢	27.7	5.3		D I	A	赤褐色	10%	覆土上層	常滑
8	甕	40.0	5.0		C D I	A	灰色	5%	覆土	瀬美
9	甕	35.4	5.0		C D I	A	灰色	5%	表探	瀬美
10	内耳鍋	34.6	4.6		C	B	黒褐色	5%	覆土上層	在地
11	内耳鍋	34.6	5.8		C	B	黒褐色	5%	覆土上層	在地
12	甕	(30.4)	6.0		C D I	C	褐色	25%	中、下層T-7-h 胎土分析No 4	在地
13	灰胎平碗	16.9	5.5		B I	A	赤茶色	15%		瀬戸
14	片口鉢			13.0	I	A	灰色	10%	上層	常滑
15	片口鉢		3.6	13.2	C I	A	赤褐色	5%	上層	常滑

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
16	灰釉小皿			5.7	BD	A	灰褐色	50%	覆土上層	瀬戸
17	土師甕皿	(7.9)	2.3	(6.0)	ABC	B	淡褐色	60%	覆土中層	在地
18	土師甕皿		6.3		BCD	B	淡褐色	10%	覆土中層	在地
19	土師甕皿	10.6	2.8	6.3	ABCD	B	褐色	80%	覆土上層	在地
20	土師甕皿	(10.8)	3.5		ABCD	B	橙褐色	20%	覆土中層	在地
21	火鉢				CG	B	褐色		覆土下層	不明
22	三足土鍋	12.7	4.0	7.2	ABCDF	B	橙褐色	70%	上層	在地
23	片口鉢	17.6	10.0		C	B	灰色	20%	覆土中層	在地
24	片口鉢	18.0	5.4		C	B	淡灰色	5%	上層	在地
25	片口鉢	27.0	5.6		CDEG	B	灰色	10%	覆土上層 下層	在地
26	片口鉢		4.2	(12.0)	CEG	C	白色	25%		在地
27	片口鉢		7.2	(11.4)	CDEG	B	灰色	30%	覆土中層	在地
28	片口鉢		9.8	(12.6)	C	C	褐色	20%	覆土中層 胎土分析No.8	在地
29	片口鉢				C	B	淡褐色		覆土中層	在地
30	片口鉢				CDF	B	灰色		覆土上層	在地
31	片口鉢				C	B	灰色		覆土上層	在地
32	片口鉢				CDG	B	淡褐色		覆土上層	在地

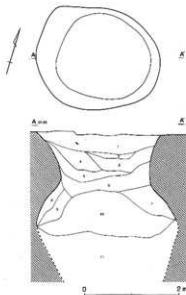
第2号井戸跡 (第134~135図)

S-8区に位置し、第5号住居跡・第2号溝を壊して造られ、第1号溝に壊されている。

平面形態は円形をしており、断面は上部が掘鉢状をしている。中で地山が崩落したため周辺は大きくえぐられている。規模は長軸2.64m、短軸2.12m、深さ4.40mであるが危険なため井戸底までの調査を断念した。大規模な井戸跡と考えられる。覆土は11層に分かれ地山の礫を多く含む。第9層以下はシルト質の粘土を主体とする。

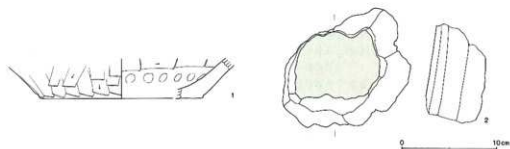
出土遺物は、常滑系の甕底部と鍋の鋳型片が検出された。1は底径17.2cm、残存高4.2cmの底部のみの破片である。胎土はD・Gを含み焼成は良好である。色調は茶褐色。覆土中から出土。2は鍋鋳型の破片である。内面の基肌はきめの細かい仕上げ真土であり、中真土・荒真土の順できめが徐々に粗くなる。残存長さ6.9cm、幅9.0cm、厚さ6.0cmである。

北側には第1鋳造遺構群が存在することから混入したものと考えられる。



- 1 褐色礫土 礫を多く含む。
- 2 褐色礫土 こぶし大の礫をやや多く含む。
- 3 褐色礫土 こぶし大の礫を多量含む。
- 4 褐色礫土 大礫を少量混入。
- 5 褐色礫土 ロームブロックを少量混入。
- 6 褐色礫土 ロームブロック、こぶし大の礫少量含む。
- 7 暗褐色礫土 6より更に粘性土が混入。
- 8 黄褐色土 礫層薄土、細礫多い。砂質。
- 9 暗褐色土 シルト質土、砂粒を多く含む。
- 10 暗灰色土 シルト質で、こぶし大の礫やや少ない。
- 11 灰褐色土 シルト質で、礫を含む。

第134図 第2号井戸跡

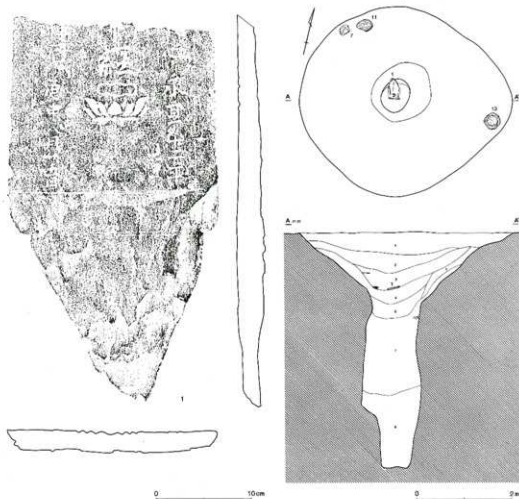


第135図 第2号井戸跡出土遺物

第3号井戸跡（第136～140図）

Q-7区に位置し、第1号鈎造跡の南側に近接し、第14号掘立柱建物跡の北側にあたる。平面形態は円形をしており、断面は上部が摺鉢状をし、中位から径を狭め細く掘られている。規模は長軸4.50m、短軸3.96m、深さ4.94mの大規模な井戸跡であった。覆土は8層に分かれ第1～3層まで礫を比較的多く含む。第4層からはやや砂質でローム・焼土を混在させる。最下層の第8層は暗青灰色有機層である。

出土遺物は、非常に多く検出された。1の板碑は井戸中央部の第3層下端から礫に混じって出土し上半部は欠損している。大きさは、長さ41.2cm、幅22.3cm、厚さ2.9cmである。下半部には、中央に「華経」、右側に「□心 永享十二年（1440年）」、左側に「禪尼 康申八月廿五日」の文字を刻んでいる。2～7の黒漆椀は第8層の上端で出土した。2～5・7は足の短い高台を持ち、底部内面には体部との境に段を持つ。2は器高がやや浅く口唇部外面が丸く膨らむ。口径15.0cm、器高2.9cm、底径6.6cmである。3は底径6.5cm、残存器高1.5cm、内外面に黒漆付着、内面体部と底部の境に段を持つ。4は器内やや厚く底径5.6cmであり、内外面黒漆。5は底径6.0cmのベタ高台で浅く造り出した底部である。黒漆が剝離しており、特に、底部外面は木地が露出している。このため、底部外面にはロクロに固定したロクロ爪の穴が見える。6は口径14.0cm、器高4.3cm、底径6.4cmであり、内外面黒漆。7は口唇部が外面に丸く膨らみ、底部と体部の境に見込みの段を持つ。底部の器内は厚く高台が長いのが特徴である。口径14.8cm、器高7.1cm、高台径7.9cm、内外面黒漆。8はおしきと考えられる。長さ24.8cm、幅4.25、厚さ3.5mmである。薄く平たい板のコーナーが残存している。また、径1.5mmの穴が残る。9は曲物の底板か。やや小型の円形をした一部である。10は半裁された竹管状をしている。11～13は曲物である。11は、表のみ黒漆が塗布されている。径20.0cm、厚さ1.3cmである。12は、中央部よりやや一方に寄ったところに1ヶ所と外縁寄りの所に3ヶ所の穴が開いている。径20.6cm、厚さはやや厚く1.6cmである。13は直径20.8cm、器高11.2cmである。側板は二重に巻かれ三重に合わさった部分で1箇所板の皮と考えられる留め具で縦に綴られている。下端部には一重に巻かれた箍がはめられており、合わせ目の両端で2箇所縦に綴られている。底板と側板との結合は、箍の外面から4箇所に打込んだ木釘によって行なわれている。14～22は在地系の内耳鍋である。23は常滑系の鉢である。24～31は在地系の片口鉢である。何れも、破片であることから片口部分は明らかでない。

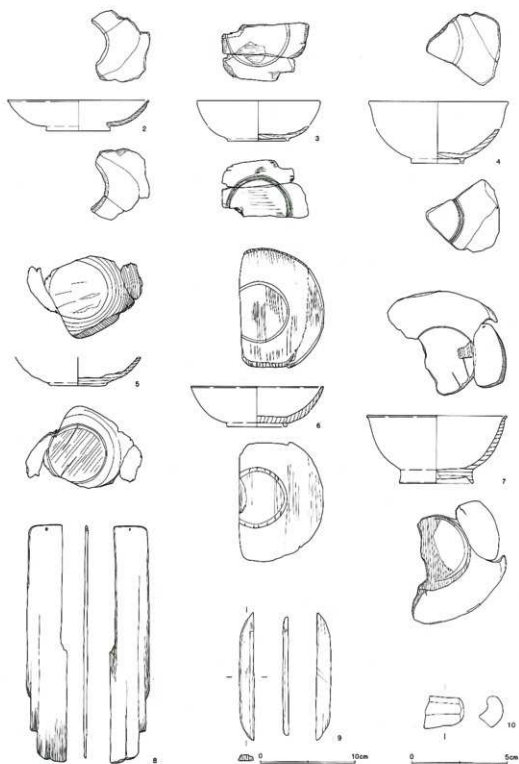


- 1 褐色土 径2~5cm大の礫、焼土・炭化粒子をやや多く含む。
- 2 褐色土 やや砂質。焼土粒子、小礫を少量含む。
- 3 褐色泥礫 こぶし大から人頭大の礫を多量含む。遺物、研型の混入多い。
- 4 明褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。やや砂質。
- 5 暗褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
- 6 暗褐色土 径5~20cm大の礫、ロームブロックを混入。
- 7 明褐色土 ローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。
- 8 青灰色土 砂質強く、径20~40cm大の礫やや多く混入。

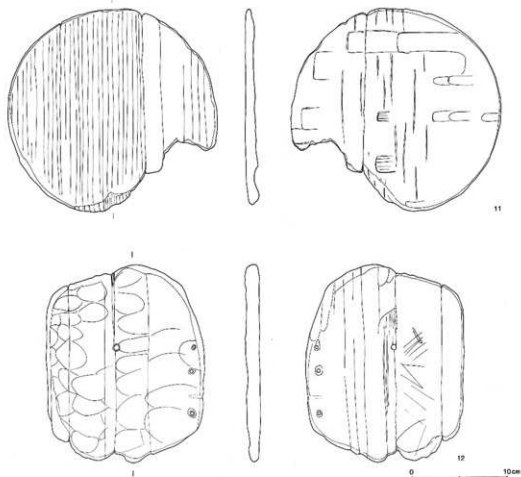
第136図 第3号井戸跡・出土遺物(1)

第2号井戸跡出土遺物観察表 (第135図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	片口鉢		4.2	17.2		A	茶褐色	10%	覆土	常滑
2	鍋	6.9	9.0	6.0	862				鋤型	



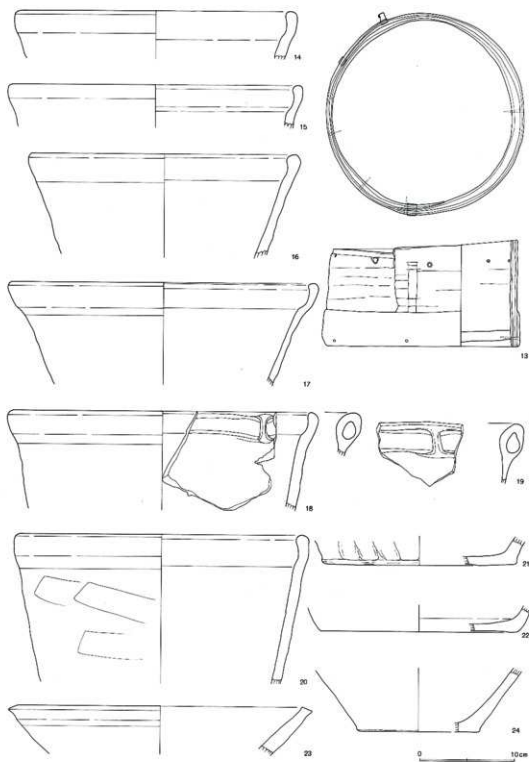
第137图 第3号井戸跡出土遺物(2)



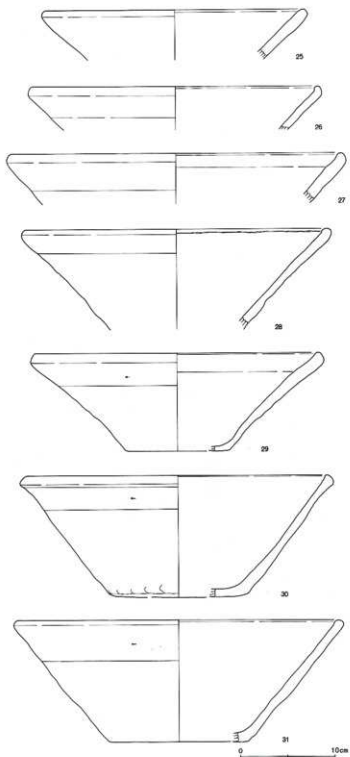
第138図 第3号井戸跡出土遺物(3)

第3号井戸跡出土遺物観察表 (第136~140図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	板碑						緑泥片岩	40%	上層	
14	内耳鍋	28.0	5.0		CDEG	C	褐色	10%	上層	在地
15	内耳鍋	30.0	4.5		CDEG	A	灰色	10%	下層 胎土分析No16	在地
16	内耳鍋	28.0	10.9		CDEG	B	灰色	10%	中層 胎土分析No13	在地
17	内耳鍋	32.0	10.8		CDEG	B	褐色	10%	中層	在地
18	内耳鍋	31.4	10.3		CDEGI	B	灰褐色	5%	下層	在地
19	内耳鍋		6.8		C	B	黒灰色	1%	下層	在地
20	内耳鍋	30.0	15.6		CDEG	C	灰褐色	10%	上層	在地
21	内耳鍋	20.6	3.0		C	B	黒灰色	10%	下層	在地
22	内耳鍋		2.8	20.8	C	C	黒灰色	10%	下層	在地
23	片口鉢	32.0	5.1		CDI	A	赤茶色	5%	上層	常滑
24	片口鉢	13.0	6.7		C	C	黒灰色	20%	下層	在地
25	片口鉢	17.2	5.2		C	B	灰色	5%		在地
26	片口鉢	30.0	4.6		C	B	褐灰色	10%	上層	在地
27	片口鉢	35.0	5.3		C	B	灰色	10%	上層	在地
28	片口鉢	32.0	10.5		C	B	褐灰色	20%	上層 下層	在地
29	片口鉢	30.0	10.3	11.0	C	B	褐色	25%	o-6-1 胎土分析No9	在地
30	片口鉢	31.6	12.8	14.8	C	C	黒灰色	20%	下層	在地
31	片口鉢	34.2	12.0	14.7	ACDEG	C	灰褐色	20%	上層 胎土分析No10	在地



第139图 第3号井戸跡出土遺物(4)



第140图 第3号井戸跡出土遺物(5)

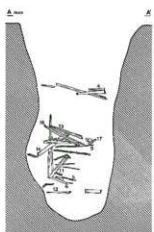
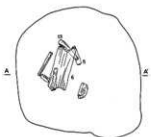
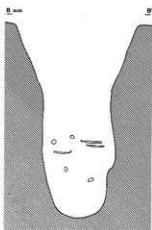
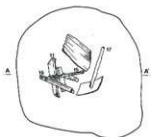
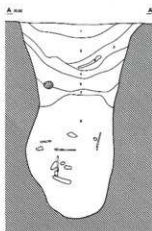
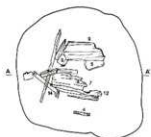
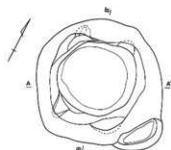
第4号井戸跡 (第141~144図)

0-8区に位置し、南北に走る第5号溝跡の東側に近接する。平面形態は円形をしており、断面は上部が楕円状をし、中位から径を狭め細く掘られている。規模は長軸2.68m、短軸2.62m、深さ4.06mである。大規模な井戸跡である。覆土は8層に分かれ第1~3層までを上層、第4~7層までを中層、第8層の黒色の粘土層を下層として遺物の取上げを行なった。下層からは比較的多くの木材を検出することができた。

出土遺物は、1・2が龍泉窯系の蓮弁椀である。3は常滑系の甕の底部で体部外面を底部下端までヘラケズリを施す。6~11は、井戸枠に使用されていたと考えられる板材である。4・5と13・14は角材である。いずれも、長軸方向に手斧の痕跡が見られ器面を成形している。それぞれの大きさは、4が長さ48.8cm、幅6.7cm、厚さ6.7cm。5が長さ48.7cm、幅6.0cm、厚さ6.2cm。13が長さ71.3cm、幅7.0cm、厚さ4.6cm。14が長さ50.7cm、幅9.7cm、厚さ4.9cm。6~11は板材である。井戸の枠板として使用されたと考えられる。6・7は手斧の痕跡がよく残っている。それぞれの大きさは、6が長さ91.6cm、幅40.0cm、厚さ5.6cm。7が長さ132cm、幅38.7cm、厚さ2.9cm。8が長さ57.1cm、幅16.7cm、厚さ2.3cm。9が長さ57.0cm、幅26.2cm、厚さ2.8cm。10が長さ81.7cm、幅22.5cm、厚さ2.5cm。11が長さ66.3cm、幅16.4cm、厚さ2.0cm。12・15~17は両端に切り込みのある井戸枠の柱材のほぞ穴に合わさる梁材と考えられる。12は一方の端部しか残存しない。また、1箇所凹状のほぞが有り直交する材との合わせ目と思われる。大きさは長さ143.5cm、幅12.5cm、厚さ7.2cmである。15は長さ91.4cm、幅6.8cm、厚さ6.2cm。16は長さ89cm、幅7.2cm、厚さ4.1cm。17は長さ88.8cm、幅7.2cm、厚さ5.2cmである。

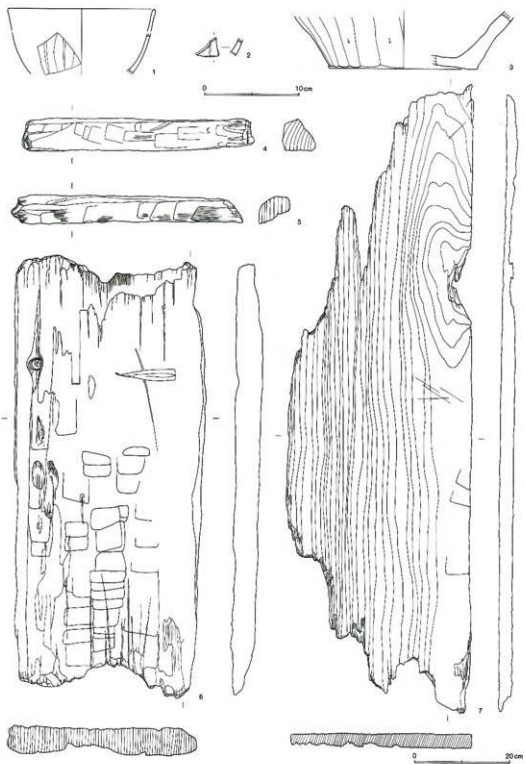


第4号井戸跡

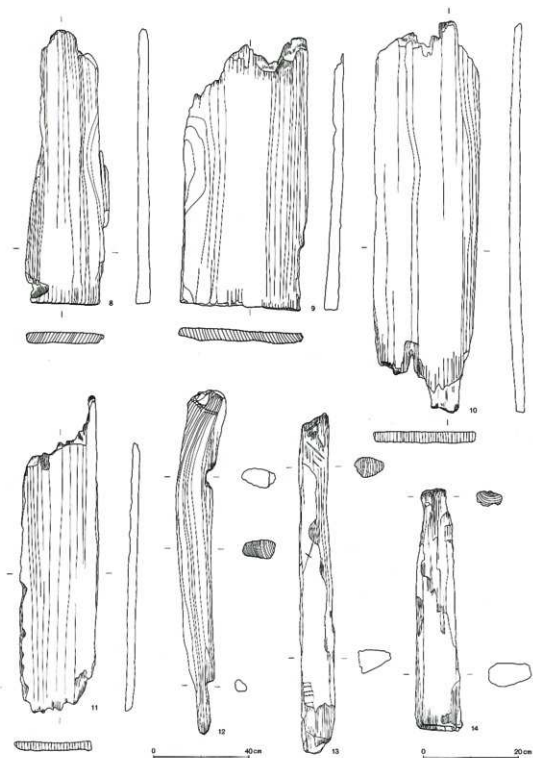


- 1 黒褐色土 焼土・ローム粒子、ロームブロック、炭化物、礫を少量含む。しまりよく、粘性あり。
- 2 黒褐色土 1よりロームブロック、礫を多く含む。しまりない。
- 3 暗茶褐色土 上層に比べ黒色強い。ローム粒子少量。粘性強い。
- 4 黒褐色土 砂質で、均一に堆積。ローム・焼土粒子を若干含む。
- 5 暗茶褐色土 焼土・ローム粒子、ロームブロック、炭化物、少量の礫を含む。
- 6 黒褐色土 5より黒色が強く、礫を多量含む。しまり弱い。
- 7 黒褐色土 6に近似。鉄分多く、サビが目立つ。
- 8 黒褐色土 黒色の粘土層。粘性強く、粒子粗い。

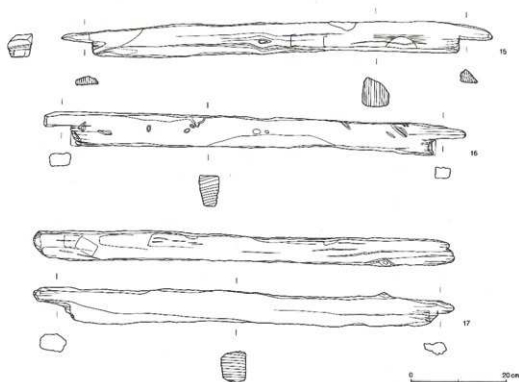
第141図 第4号井戸跡



第142图 第4号井戸跡出土遺物1)



第143图 第4号井戸跡出土遺物(2)



第144図 第4号井戸跡出土遺物(3)

第4号井戸跡出土遺物観察表 (第142~144図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗		4.3		I	A	淡緑色	10%	棟I 5 b	中国・龍泉
2	青磁碗		1.7		I	A	淡緑色	5%	棟I 5 b	中国・龍泉
3	甕		6.1	15.8	D I	A	灰色	40%	SE-14	常滑

第8表 第1区井戸跡一覧表

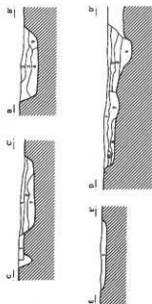
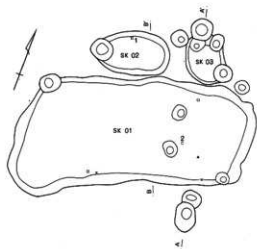
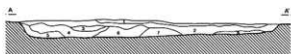
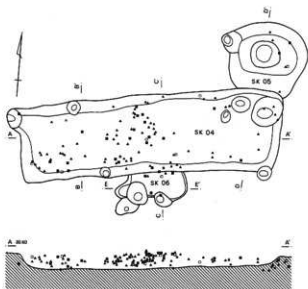
(単位 m)

新番号	旧番号	位	置	形	態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SE-01	SE-01	T-7,8		円形		5.12	4.82	5.14	N-75°-W	中世
	02	02	S-8	円形		2.64	2.12	(4.40)	N-72°-E	中世
	03	08	Q-7	円形		4.50	3.96	4.94	N-77°-E	中世
	04	03	O-8	円形		2.68	2.62	4.06	N-64°-E	中世

(5) 土 壇

本区からは第1~84号土壇を検出した。この内、第1~10号土壇は検出した位置や共伴遺物・覆土の状況から鋳造関連の土壇としての性格が強い。

出土遺物のうち、第152図の1は第2号土壇から検出した棒状の鉄製品で、筧状工具の可能性が考えられる。2は鉄片であり、3は羽形でいずれも第1土壇内から検出した。4~6は、第32号土壇から出土し、4・6は在地の甕、5は播鉢で底部がかなり磨滅し凹み胎土中に白色針状物質が見られることから在地産である。7は第69号土壇より検出した青磁碗である。



SK-01

- 1 暗褐色土 泥を多量、焼土、炭化物を混入。
- 2 褐色土 焼土・炭化・ローム粒子を少量含む。
- 3 褐色土 2に近似。ややしまりもつ。

SK-04

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を含み、非常にハード。
- 2 暗褐色土 ローム (径 1cm)・焼土粒子、炭化物を含み、やや粘性がある。
- 3 黒褐色土 ローム粒子を多量含み、しまりよい。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量、焼土も含む。しまり弱い。
- 5 黒褐色土 ローム粒子 (径 3mm) を疎らに含み、しまり弱い。
- 6 暗褐色土 ローム粒子 (径 8mm) を多量に含み、やや粘性がある。
- 7 黒褐色土 ローム粒子、炭化物を少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック少量含み、やや粘性がある。
- 9 暗褐色土 ローム粒子 (径 3mm) を少量、焼土も含む。しまりよい。
- 10 暗褐色土 ローム粒子を微量含み、粘性がある。

SK-05

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を含み、非常にハード。
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (径 3mm) を少量含む。
- 3 暗褐色土 炭化物、ローム粒子を含み、ソフト。
- 4 黒褐色土 ローム粒子を少量含み、やや砂質。

SK-06

- 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子、炭化物を少量含む。

0 2m

第145図 第1～6号土壌

第1・2・3号土壌 (第145図)

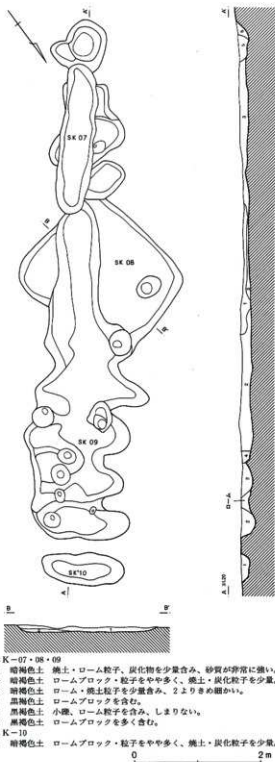
第1 鑄造遺構群の西側に隣接して検出された。鑄造関連土壌と考えられる。第1 土壌は、東西方向に長軸をもつ短冊状である。規模は長さ4.00m、幅1.66m、深さ10cmである。掘り込みは浅く地山のローム面はややしまりをもつ。覆土中からは鉄滓を多く検出した。北側に不整形の第2・3号土壌を確認したが、関連性は不明である。

第4・5・6号土壌 (第145図)

第1 鑄造遺構群の北側に近接して検出された。鑄造関連土壌と考えられる。第4号土壌は第5・6号土壌よりも新しいことが断面観察によって明らかにされた。南側の第5号土壌内から焼土塊と炭化物を検出。第4号土壌は東西方向に長軸をもつ短冊状である。規模は長さ4.14m、幅1.22m、深さ20cmである。覆土中からは鉄滓を多く、炉壁、羽口等の鑄造遺物を検出した。

第7・8・9・10号土壌 (第146図)

第1 鑄造遺構群の南側に隣接して検出された。鑄造関連土壌と考えられる。第8号土壌は第7・9・10号土壌よりも新しいことが断面観察によって明らかにされた。第8号土壌は南北方向に長軸をもつ方形である。規模は長さ2.26m、幅1.94m、深さ9cmと浅い。覆土はしまり弱く砂質土を主体としていた。第7・8・9号土壌は不整形で、連続して切り合っている。第1 鑄造遺構群と掘り方の軸方向が類似している。



SK-07・08・09

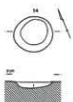
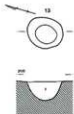
- 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子、炭化物を少量含む。砂質が非常に強い。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・粒子をやや多く、焼土・炭化粒子を少量。
- 3 暗褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。2よりきめ細かい。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黒褐色土 小礫、ローム粒子を含む。しまりない。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

SK-10

- 1 暗褐色土 ロームブロック・粒子をやや多く、焼土・炭化粒子を少量。

0 2m

第146図 第7～10号土壌



S K-11

1 灰褐色土 焼土粒子を含む。

S K-12

1 灰褐色土 焼土粒子を含む。

S K-13

1 暗褐色土 ローム・炭化・焼土粒子を含む。

S K-14

1 暗灰褐色土 焼土粒子、小礫を少量含む。

S K-15

1 灰褐色土 焼土粒子、小礫を少量含む。

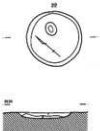
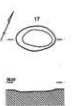
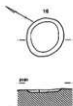
S K-16

1 黒褐色土 焼土・ローム粒子、炭化物少量含む。

S K-18

1 黒褐色土 ローム・焼土粒子微量含む。ハード。

2 黒褐色土 焼土粒子を少量含む。



S K-19

1 灰褐色土 砂質が強く、しまり弱い。

S K-20

1 褐色土 ローム粒子、ブロックを混在。

S K-21

1 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。

2 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。

3 暗褐色土 ローム粒子を多量含む。

4 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。

S K-22

1 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。

2 黒褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子、炭化物も含む。

S K-23

1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。

S K-24

1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック、焼土粒子含。

2 暗褐色土 軟質ローム土を主体、粘性がある。

S K-25

1 褐色土 ローム・焼土粒子を多く含む。

2 黄褐色土 ローム土を主体。

S K-26

1 黒褐色土 ロームブロック、粒子均質に混在。硬立埋土に近似。

S K-27

1 暗褐色土 焼土粒子、ロームブロックを含む。

S K-28

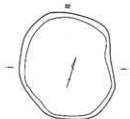
1 暗褐色土 焼土・炭化粒子多く、しまり弱い。

2 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含む。



0 2m

第147図 第1区土壌(1)



SK-29

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。ハード。
- 2 黒褐色土 暗茶褐色ローム・焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 2に近似するが、色調がより暗い。
- 4 黒褐色土 ローム粒子を含み、粘性がある。
- 5 暗褐色土 ロームブロックをさらに、粘性ある。

SK-31

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 ローム土を主体。
- 3 黒褐色土 ローム・焼土粒子微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム・焼土粒子微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。

SK-32

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子多量含む。ハード。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。



SK-33

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子含。

SK-35

- 1 暗褐色土 ローム土を多く含む。

SK-36

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子を含み、しまり強い。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを含み、しまりもつ。
- 3 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 4 黄褐色土 ローム土を多く含む。

SK-37

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子含。

SK-38

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多く含む。
- 3 暗茶褐色土 軟質ローム土を主体。

SK-39

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を含む。
- 2 茶褐色土 軟質ローム土を多量。

SK-40

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子少。
- 2 暗褐色土 ローム・焼土粒子少。
- 3 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

SK-41

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロック、焼土粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック含む。

SK-42

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量。

SK-43

- 1 黒褐色土 焼土・炭化粒子少量、さめ粗く、焼土微量。
- 2 暗褐色土 焼土微量。
- 3 褐色土 焼土粒子を含む。

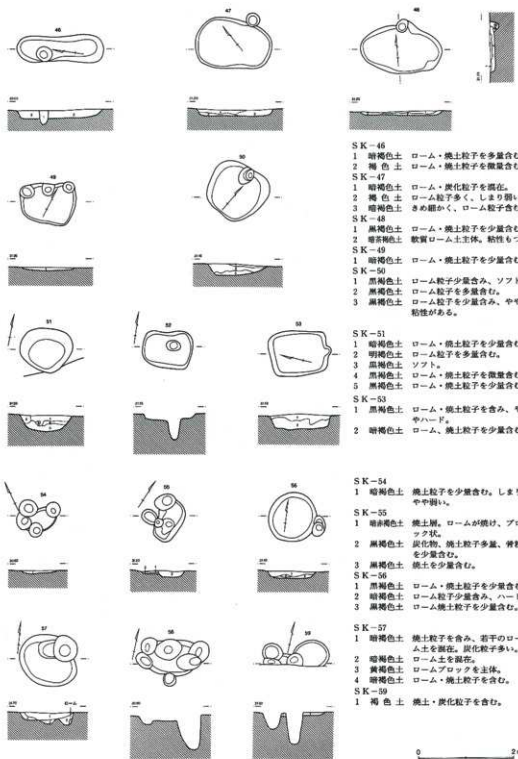
SK-44

- 1 黒褐色土 焼土・ローム粒子少。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量。

SK-45

- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム・焼土粒子を微量含み、粘性もつ。

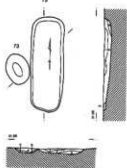
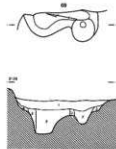
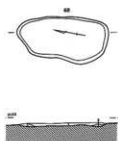
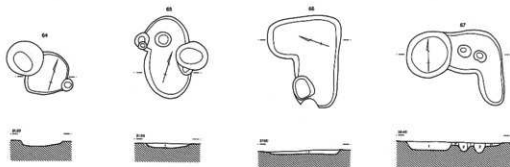
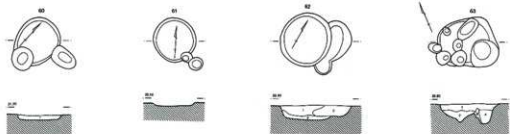
0 2m



- SK-46
 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子を多量含む。
 2 褐色土 ローム・焼土粒子を微量含む。
- SK-47
 1 暗褐色土 ローム・炭化粒子を混在。
 2 褐色土 ローム粒子多く、しまり強い。
 3 暗褐色土 きめ細かく、ローム粒子含む。
- SK-48
 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
 2 暗褐色土 軟質ローム土主体。粘性もつ。
- SK-49
 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
- SK-50
 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む、ソフト。
 2 暗褐色土 ローム粒子を多量含む。
 3 黒褐色土 ローム粒子を少量含む、やや粘性がある。
- SK-51
 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子を多量含む。
 3 黒褐色土 ソフト。
 4 黒褐色土 ローム・焼土粒子を微量含む。
 5 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
- SK-53
 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子を含み、ややハード。
 2 暗褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
- SK-54
 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。しまりやや強い。
- SK-55
 1 暗褐色土 焼土層。ロームが狭く、ブロック状。
 2 暗褐色土 炭化物、焼土粒子多量、骨粉を少量含む。
 3 暗褐色土 焼土を少量含む。
- SK-56
 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む、ハード。
 3 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
- SK-57
 1 暗褐色土 焼土粒子を含み、若干のローム土を混在。炭化粒子多い。
 2 暗褐色土 ローム土を混在。
 3 暗褐色土 ロームブロックを主体。
 4 暗褐色土 ローム・焼土粒子を含む。
- SK-59
 1 褐色土 焼土・炭化粒子を含む。

0 2m

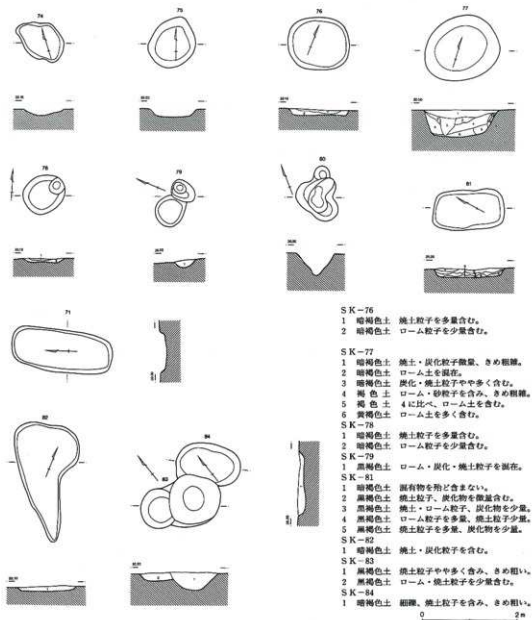
第149図 第1区土壌(3)



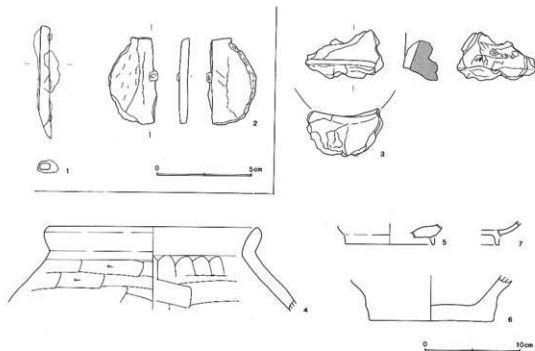
- S K-60
1 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む。
- S K-62
1 暗灰褐色土 ローム粒子を多量含む。
2 暗灰褐色土 崩れたロームブロックを多量含む。
3 暗褐色土 ローム・炭化粒子を混在。
- S K-63
1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む、ややハード。
2 暗褐色土 ローム粒子(径5mm)を少量含む。
3 明褐色土 ローム粒子を多量含む。
4 黒褐色土 焼土・ローム粒子を微量含む。
- S K-65
1 暗褐色土 小礫、焼土粒子やや多い。
- S K-66
1 暗灰褐色土 砂礫多く、焼土粒子含む。
- S K-67
1 黒褐色土 ローム・炭化粒子を少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒子を少量混入。
3 黒褐色土 焼土・炭化粒子やや多く含む。
- S K-68
1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を含む。
2 暗茶褐色土 軟質ローム土を主体、粘性強い。
- S K-69
1 黒褐色土 小礫、ローム・焼土粒子含む。
2 黒褐色土 1より黒色が強く、粘性強い。
3 黒褐色土 2より茶色が強く、粘性強い。
4 黒褐色土 軟質ローム土が多く混入。
- S K-72・73
1 黒褐色土 ローム・焼土粒子少、粘性もつ。
2 黒褐色土 ローム・焼土粒子、小礫を含む。
3 暗茶褐色土 軟質ローム土を主体、粘性強い。
4 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
5 暗茶褐色土 軟質ロームを主体、粘性強い。

0 2m

第150図 第1区土壌(4)



第151図 第1区土壌(5)



第152図 第1区土壌出土遺物

第1区土壌出土鉄造遺物観察表 (第152図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
1	鉄塊系遺物	5.7	1.1	0.6	10		SK 1 No. 1		塊 1
2	鉄塊系遺物	4.5	2.6	0.5	12		SK 1 No. 3		塊 1
3	羽口	5.1	8.4	3.7	125		SK 1		羽口

第1区土壌出土遺物観察表 (第152図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
4	甕	(22.0)	8.0		C	C	暗褐色	25%	SK 32 覆土 胎土分析No 2	在地
5	揃鉢		1.5		D F	A	褐灰色	20%	SK 32 覆土	在地
6	甕		4.3	(12.8)	C	B	灰褐色	30%	SK 32 覆土	在地
7	青磁碗				I	A	緑色	5%	SK 69 一括 坏IV	中国・龍泉

第9表 第1区土壌一覽表

(単位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-01	SK-24	Q-6	長方形	400	166	10	N-57'-E	中世
02	29	Q-6	楕円形	112	42	6	N-62'-E	中世
03	47	Q-6	長方形	76	62	2	N-10'-W	中世
04	25	P-6, 7	長方形	414	122	20	N-84'-E	中世
05	27	P-7	円形	(126)	120	81	N-61'-E	中世
06	48	P-6	(正方形)	116	(38)	5	N-81'-E	
07	53	R-6	長方形	236	52	6	N-38'-E	中世
08	51	Q, R-6	方形	226	194	9	N-14'-W	中世
09	52	Q-6	不整形	534	100	7	N-40'-E	中世
10	68	Q-6	長方形	130	48	18	N-50'-W	中世

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-11	SK-42	S-8	楕円形	74	56	8		
12	39	S-8	楕円形	80	66	4	N-48°-W	
13	46	S-7	楕円形	76	62	41		
14	44	S-8, 9	円形	80	76	11		
15	45	S-9	円形	68	64	6		
16	23	P-7	楕円形	86	78	6		
17	156	O-6	楕円形	84	50	4	N-67°-E	
18	11	R-7	楕円形	90	64	18	N-68°-E	中世
19	105	P-7	円形	100	96	6	N-6°-w	
20	85	S-9	円形	106	96	16	N-20°-E	
21	08	S-7	楕円形	120	104	11		
22	09	R-7	円形	116	116	10		古代
23	59	S-7	円形	102	100	6	N-42°-E	
24	56	Q-8	円形	90	88	12	N-32°-E	
25	199	O-6	円形	118	112	18	N-26°-W	
26	40	S-7	楕円形	112	96	24	N-9°-W	古代
27	35	T-7, 8	楕円形	120	(84)	12	N-37°-W	
28	198	O-6	楕円形	156	126	3	N-32°-W	
29	03	S-8	楕円形	100	80	34	N-25°-E	
30	10	R-7	円形	114	112	10		古代
31	14	P-6, 7	楕円形	128	98	29	N-19°-W	中世
32	76	O, P-7	円形	224	196	16	N-17°-W	中世
33	36	S-8	楕円形	74	52	8		
34	96	R-6	長方形	100	48	11	N-45°-E	
35	34	S-7	長方形	88	52	12	N-75°-E	古代
36	197	O, P-6	長方形	90	62	41	N-58°-E	
37	06	R-7	長方形	96	48	35	N-74°-E	古代
38	55	Q-8	楕円形	98	74	13	N-59°-E	
39	57	Q-7	長方形	112	68	6	N-35°-E	
40	16	P-6	楕円形	118	78	19	N-84°-E	
41	50	Q-6	楕円形	84	64	25	N-35°-E	中世
42	41	S-7	楕円形	118	76	11	N-80°-W	
43	100	P-7	長方形	142	84	17	N-54°-E	
44	13	P-7	長方形	142	78	29	N-28°-W	中世
45	49	O-7	(長方形)	116	104	12	N-72°-W	中世
46	104	P-7	長方形	184	50	18	N-10°-W	
47	32	S-7	楕円形	162	96	16	N-41°-W	
48	26	P-7	長方形	174	100	9	N-86°-W	
49	05	R-7	長方形	118	78	8	N-40°-E	
50	07	R-7	楕円形	130	120	15	N-56°-E	古代
51	02	R-8, 9	正方形	64	60	29	N-17°-W	
52	04	R-7, 8	長方形	88	64	64	N-13°-E	中世
53	01	R-8, 9	長方形	130	94	27	N-20°-W	中世
54	101	P-7	楕円形	74	50	7	N-64°-W	中世
55	28	R-7	長方形	88	56	11		
56	12	Q-7	円形	102	102	15	N-26°-W	
57	33	S-7	楕円形	128	106	14	N-62°-W	古代
58	58	P-7	不整形	132	68	14	N-79°-E	

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-59	SK-89	T-8	楕円形	78	58	3	N-85°-E	
60	38	S-9	円形	106	90	13	N-30°-W	古代
61	65	O-9	円形	90	90	8		
62	31	Q-6	円形	114	108	29	N-23°-W	
63	15	P-6	楕円形	126	98	34	N-70°-W	弥生
64	43	S-7	正方形	88	86	11	N-17°-W	
65	88	T-8	長方形	174	96	12	N-20°-W	
66	37	S-8	長方形	194	96	13	N-68°-E	
67	106	O-7	円形	96	96	19		
68	54	Q-7	不整形	192	88	7	N-10°-W	
69	30	Q-8	(楕円形)	156	(30)	44	N-14°-W	
70	19	Q-8	不整形	158	126	9	N-56°-E	
71	62	N, O-9	長方形	214	88	12	N-7°-E	古代
72	17	Q-8	長方形	196	70	11		
73	18	Q-8	楕円形	66	50	11	N-27°-W	古代
74	160	N-6	不整形	108	78	13	N-48°-W	中世
75	157	O-6	円形	114	96	15	N-18°-E	中世
76	162	N-6	円形	128	108	12	N-70°-E	中世
77	60	O-9	円形	158	122	57	N-73°-E	古代
78	161	N-6	円形	86	82	6	N-87°-E	
79	200	O-7	楕円形	100	48	10	N-70°-W	
80	66	O-8	不整形	100	56	46	N-31°-W	
81	67	O-8	長方形	150	80	21	N-27°-W	
82	163	N, O-7	不整形	250	90	9	N-28°-W	
83	158	O-6	楕円形	166	98	36	N-53°-W	
84	159	O-6	楕円形	138	82	10	N-45°-W	

(6) 火葬墓

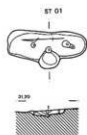
本区からは第1～9号の火葬墓を検出した。形態は「T」型が4基、長方形が3基、楕円形が2基である。検出遺物が無いため正確な時期は不明であるがいずれも中世の遺構と考えられる。

第5号火葬墓は「T」字型であるが、長軸の北側と南側の壁は焼けて焼土化している。第9号も壁が焼土化している。覆土には焼土・炭化物・骨片を含む。

第10表 第1区火葬墓一覧表

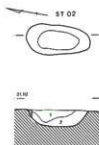
(単位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	備考
ST-01	ST-01	T-7	長方形	126	58	11	N-2°-W	
02	02	T-7	楕円形	100	48	26	N-4°-W	
03	05	O-6	T型	122	80	16	N-2°-W	
04	08	Q-8	T型	114	84	13	N-45°-W	
05	09	Q-7	T型	104	74	27	N-25°-W	
06	10	O-9	長方形	150	66	6	N-67°-E	
07	11	N-9	楕円形	94	52	6	N-63°-E	
08	12	O-9	T型	106	72	16	N-18°-W	
09	SK-22	Q-7	長方形	162	63	18	N-5°-W	



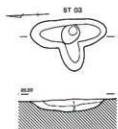
ST-01

- 1 黄褐色土 炭化物含む。
- 1' 黄褐色土 1に類似。
- 2 黒色土 炭化物主体褐色土混在。焼土粒子少量含む。



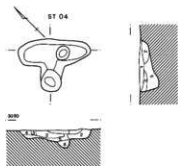
ST-02

- 1 褐色土 焼土粒子少量含む、ボンボン。
- 2 褐色土 焼土粒子多量、粘土粒子少量含む。



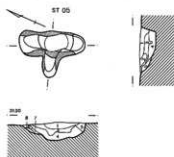
ST-03

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、炭少量。
- 2 黒色土 炭、焼土粒子混在。



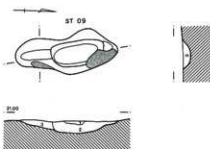
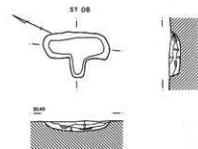
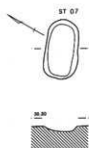
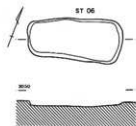
ST-04

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、焼土ブロック、炭化物含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、焼土ブロック多量。
- 3 黒褐色土 焼土・ローム粒子含む。
- 4 黒褐色土 炭化物多量含む。
- 5 黒褐色土 焼土粒子、炭化物少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒子少量含む。しまり強い。



ST-05

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、焼土ブロック、炭化物多量含む。
- 2 黒色土 炭化物層。
- 3 黒褐色土 1より含有物少ない。
- 4 茶褐色土 骨片多量含む。しまり弱い。
- 5 赤褐色土 焼土層。
- 6 黒色土 炭化物層。
- 7 赤褐色土 焼土層。
- 8 茶褐色土 焼けてゴロゴロしている。



ST-08

- 1 赤褐色土 焼土粒子、ブロック含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子含む。
- 3 黒色土 炭化物多く、焼土粒子混在。

ST-09

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物、焼土ブロック。
- 3 黒褐色土 ローム・焼土粒子、炭化物、ブロック多量。

0 2m

2 第2区の遺構と遺物

本区は金井遺跡B区のほぼ中心にあたる。1区との境には未調査区を挟み、東側に位置する。台地の平坦部分にあたり1区と地形的には同じ条件にある。しかし、大きく異なる点は東側は台地縁辺にあたり緩斜面へと地形を変える変換部にある。このことが、本区特有の遺構を検出する原因とも見られる。

まず、本区で検出された鑄造遺構群は第2・3・4鑄造遺構群である。第2鑄造遺構群からは容器鑄型や三叉状土製品の道具を検出した。第3・4鑄造遺構群は鑄造滓が浅く掘り窪められた土壌内にまとまって廃棄された状態で検出された。これは、1回の鑄造作業(溶解炉の操業)において廃棄される廃滓量とも考えられ、基準量として捉えることもできる。鑄造関連遺構としては、第1・2・3号粘土採掘跡、第1号炭焼き窯跡、そして、土壌として報告するが、第85・117・118号土壌に見られる竅穴状遺構遺構や第86号土壌をはじめとする鑄造関連土壌を多く検出した。

このように、本区は他の区には見られない鑄造工程の中でも溶解作業に置ける準備工程、或いは、造形工程といった前処理作業の工程を担う様相も兼ねていることが窺える。しかも本区は西に第12号溝跡、東は第7・20・22・23号溝をもち区画性が強い。

以下本区検出の鑄造跡、建物跡、溝跡、井戸跡、鑄造関連土壌を含む土壌について遺構と遺物の記述をする。



2区(東から)



第154図 第2区遺構配置図

(1) 鑄造跡

a 第2鑄造遺構群

本群は調査区の中央部北側の舌状に伸びる台地上の平坦地にあたる。北側は調査区域外になる。東側は緩やかな傾斜をもち第22号溝跡を境に緩斜面となる。南側は台地平坦面が広がるが第20・21・22号溝を境に鑄造遺構群は途切れていると考えられる。さらに南側には、第3・4鑄造遺構群が展開している。検出された鑄造遺構は第1～5号鑄造土壌、第1～3号廃滓、第1号炉跡・第1号鑄込み跡である。周辺には、鍛冶炉を伴う第1号竪穴状遺構、木炭痕をもつ第1号炭焼き窯、第3号粘土探掘跡や規模の大きい鑄造関連土壌が多数検出された。

遺構

第1号鑄造土壌 (第158図)

本土壌は、第7鑄造遺構群の中心部にあたる。西側に第2号廃滓跡、更に西側には第2号粘土探掘跡が存在する。北側には鍛冶炉を伴う第85号土壌が存在し、南側には第2～5号鑄造土壌や第1・3号廃滓跡が存在する。形態は隅丸方形で南側に第3号鑄造土壌を伴う。床面中央部に焼土を伴う直径25cm程の炉跡を検出した。規模は東西1.56m、南北1.65m、深さ32cmである。断面観察によると本土壌の覆土はローム・焼土・炭化粒子を含みしまりをもつ第4・5層の埋め戻した土(掘り方埋土)が見られる。

第2号鑄造土壌 (第157図)

本土壌は、第1号鑄造土壌の南側に位置する。形態は南北にやや長い隅丸長方形である。底面はロームブロックを多量に含む硬い平坦な床面である。床面の中央やや南よりに焼土を伴う直径18cm程の炉跡を検出した。壁際には周溝状に溝を全周させ東側に小ピットを伴う。規模は南北2.07m、東西1.54m、深さ21cmである。断面観察によるとロームを多く含む第3・4層によって埋め戻され整地した(掘り方埋土)と考えられる。第1層は溝の覆土である。

第3号鑄造土壌 (第158図)

本土壌は、第1号鑄造土壌の南側に重複して検出した。本土壌の方が古いと考えられる。形態は楕円形と推測される。規模は東西0.88m、深さ18cmである。覆土は第7～9層であり、第8・9層はロームブロックを多く含むことから掘り方埋土と考えられる。

第4号鑄造土壌 (第159図)

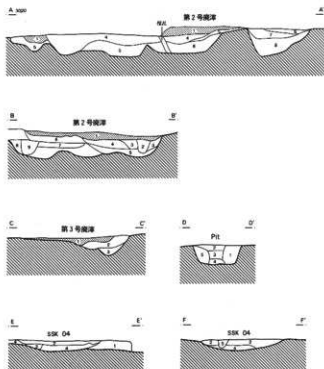
本土壌は、第5号鑄造土壌を壊し、南側に位置する。形態は円形であり、底面は中央がやや深く皿状をしている。規模は径1.19m、深さ18cmである。覆土は第4層のローム土を多く含む黄褐色土をもち、その上層は第2層の焼土・炭化粒子を含む褐色土が堆積している。

第5号鑄造土壌 (第159図)

本土壌は、第4号鑄造土壌の北に隣接して位置する。覆土は第1号廃滓の堆積が見られる。また、南寄りには鑄型集中区を検出しその下面には第1号鑄込み跡を検出した。形態はやや大型の隅丸方形であり、底面は中央がやや深く皿状をしている。規模は南北2.83m、東西2.95m、深さ25cmである。覆土は鉄塊、炉壁、鉄滓、鑄型、羽口等の廃滓で覆われていた。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。



第155图 第2号铸造遗址群全体图(1)



第156図 第2 群遺構群全体図(2)

第2号遺溝

- 1 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを多く含み、しまりもつ。
- 2 暗褐色土 鉄滓を多く含み、しまりやや弱い。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒子含み、しまり弱い。(2の遺溝上に1のローム土を貼り込んでいる。)
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 褐色土 粘土質、ロームブロックを含む。
- 6 褐色土 砂質、焼土粒子、粘土ブロック含。(2以下は粘土層礫層による覆土)
- 7 褐色土 若干の炭化粒子とロームブロック、ローム粒子を含み、粘性もつ。
- 8 黄褐色土 ローム土を主体、黒褐色土を混在。
- 9 褐色土 ローム粒子含み、しまりやや弱い。

第3号遺溝

- 1 暗褐色土 鉄滓を多量含む。
 - 2 暗褐色土 焼土・ロームを多量含む。
 - 3 褐色土 ロームやや多い。
- * 2, 3は溝の覆土。

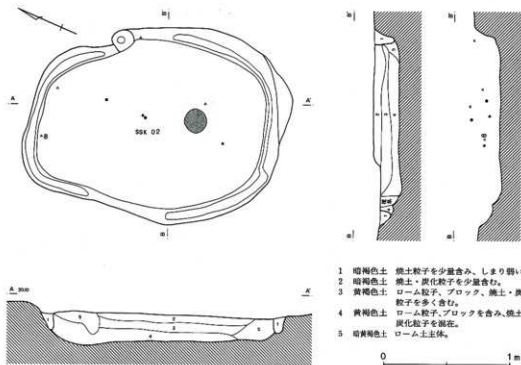
Pit

- 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ローム・焼土・炭化粒子を混在。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体、しまり強い。
- 4 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを混在。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化粒子含み、しまり弱。

第4号跡遺土塊

- 1 黄褐色土 ローム土主体、焼土・炭化粒子を含む。
- 2 褐色土 ローム・焼土・炭化粒子を含む。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまり弱い。
- 4 黄褐色土 焼土・炭化粒子を混在、ローム土多量含む。
- 5 黒褐色土 しまりやや弱く、砂粒子を含む。

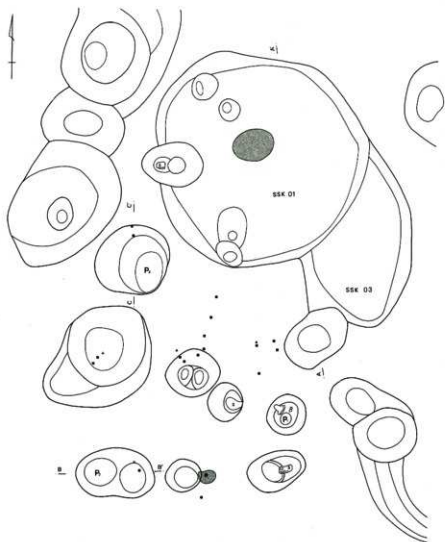
0 2m



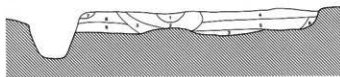
第157図 第2群第2号遺造土塊

- 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含み、しまり弱い。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子を少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子、ブロック、焼土・炭化粒子を多く含む。
- 4 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを含み、焼土・炭化粒子を混在。
- 5 暗黄褐色土 ローム土主体。

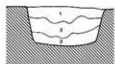
0 1m



A 200



B



B'

C



C'

第1号鑄造土塊

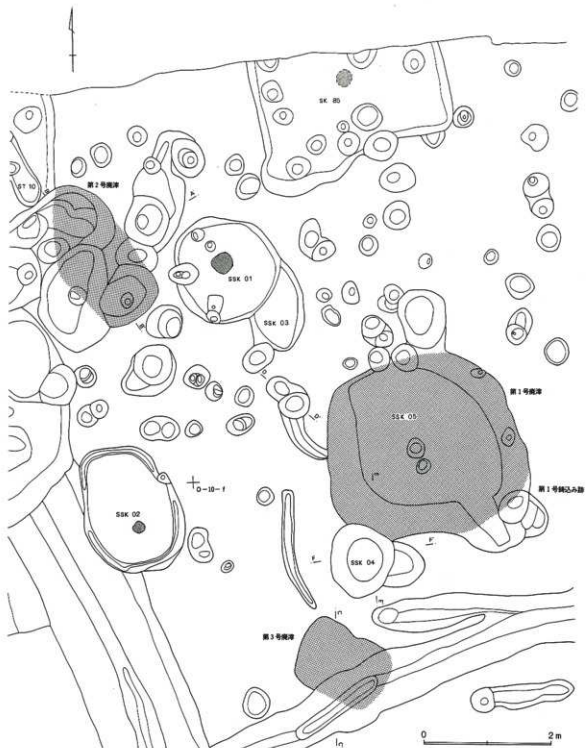
- 1 褐色土 焼土・炭化粒子を多量含む。
- 2 黒褐色土 1に比べ、暗い。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒子を混入。しまりややもつ。
- 4 褐色土 ローム・焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 5 褐色土 ローム・焼土・炭化粒子混在。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを混在。
- 7 黄褐色土 焼土・ローム粒子を含む。
- 8 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを多く含む。
- 9 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを多く、焼土・炭化粒子も含む。

P i t - 2 - 3

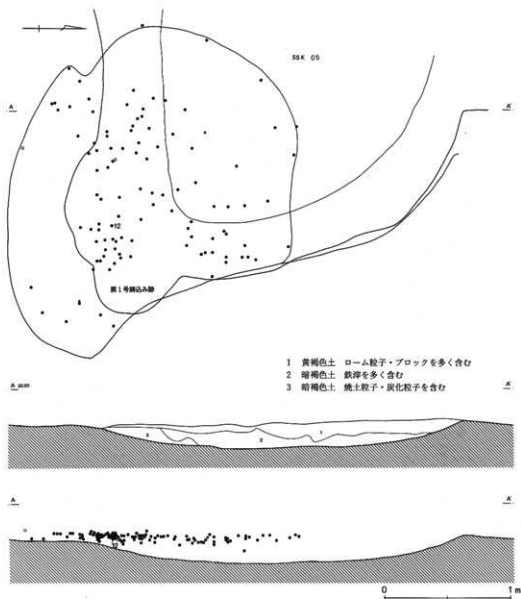
- 1 黄褐色土 ローム土を主体。
- 2 暗褐色土 ローム・焼土・炭化粒子混在。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体。

0 1 m

第158図 第2群第1・3号鑄造土塊



第159图 第2群第4・5号钊造土壤

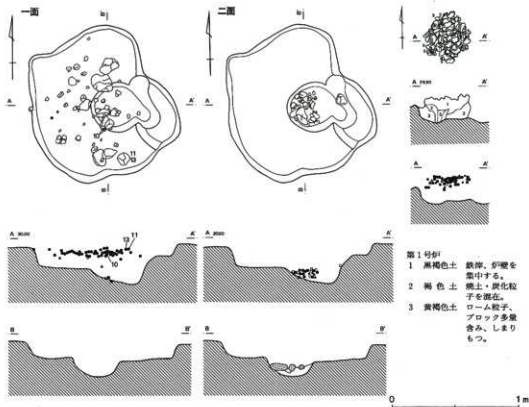


第160図 第2群第1号鋳込み跡(1)

第1号鋳込み跡 (第160～161図)

本遺構は、鋳型集中区の下層から検出された。形態は方形の掘り方をもつ土壇状で東側の壁に円形の鋳込み跡と考えられる円形の掘り込みをもつ。規模は方形の掘り方が南北1.21m、東西0.90m、深さ14cmである。円形の鋳込み部分は直径39cm、深さが土壇の底面から14cmである。土壇底面は地山のローム面を平坦に掘り込み壁は垂直に立ち上がっていた。

覆土中には鍋・容器の鋳型片を検出したが、円形の鋳込み中心部には炉壁片とこぶし大の石がま



第161図 第2群第1号鋳込み跡(2)・第1号炉跡

まって出土した。

第1号鋳込み跡および鋳型集中区から出土した鋳型片は、10の容器状鋳型や12の鍋鋳型である。また、11・13の容器鋳型が見られこれらの鋳型と同様のものを第1号鋳造遺構群から検出している。

第1号炉跡 (第161図)

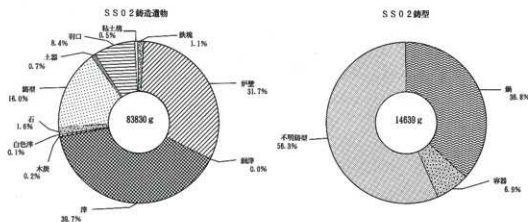
第2鋳造遺構群の南に位置し、第162・163号土壇の南東にあたる。本炉は第18号溝跡と重複し、その壁際に造られている。断面観察によると中心に据えた石を第3層のローム粒子・ブロックを多く含む黄褐色土により支え、これらの基礎の上に炉壁片を主体とする第1層が載っている。おそらく、この位置に溶解炉が造られていたものと考えられる。

遺物

鋳造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊946g、炉壁26539g、銅滓35g、鉄滓33259g、木炭166g、白色滓112g、石1327g、鋳型14639g、土器608g、羽口7072g、粘土塊392gである。

遺物は各遺構覆土および上層を覆っていた堆積層内から検出したグリッド出土遺物の合計である。遺物は計量比から見ると鋳型・石は遺構内の方がグリッド出土遺物より多いことが窺え、炉壁・羽口の溶解遺物、鉄塊・鉄滓・白色滓・木炭の溶解時にできる廃滓遺物はグリッド出土の方が約2倍の割合で多いことがわかった。このことは、堆積層が自然の堆積物で構成されたのではなく鋳造遺

第11表 第2 鋳造遺構群遺物計量表(1)



小番号	鉄屑	銅質	銅滓	木炭	白色滓	石	銅屑	土器	羽口	粘土層	
SSK-1	210	1536	0	1787	16	6	844	2506	55	152	0
SSK-2	161	595	0	1893	50	19	282	30	536	0	
SSK-4	0	56	0	263	0	0	199	9	30	0	
鹿澤1	86	4420	0	5730	12	9	45	1058	37	1302	0
鹿澤2	11	3210	0	4127	6	35	30	385	0	692	58
鹿澤3	103	866	20	3693	1	2	169	281	992	0	
1 鉄心み	0	0	0	0	11	0	2	5739	0	0	0
1 身甲	27	3188	0	648	0	0	95	0	0	40	0
0-10-a	22	1363	0	1765	11	0	27	515	20	404	0
0-10-b	55	798	0	907	5	0	18	258	16	158	24
0-10-c	184	7650	0	7688	46	0	162	330	56	2130	204
0-10-d	0	58	0	111	0	0	0	0	0	0	0
0-10-e	40	345	0	224	0	0	0	145	0	43	0
0-10-f	18	385	0	899	7	0	18	446	14	31	1
0-10-g	10	187	0	287	0	0	0	505	16	49	66
0-10-h	47	748	0	490	0	4	10	0	85	91	0
0-10-i	4	35	0	120	0	0	0	38	10	51	0
0-10-k	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0
0-10-l	0	7	0	16	0	0	0	0	0	0	0
K-10-f	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
K-10-n	21	1212	0	2578	1	0	15	257	48	450	32
合計	916	26539	20	30259	166	112	1307	13321	608	7072	362

小番号	銅	容器	雙輪	解解	他の解	仏具	不明銅質	日用品小計	仏具小計	銅型合計
土器	425	0	0	0	0	0	883	429	0	1308
SSK-1	560	1000	0	0	0	0	846	1560	0	2506
SSK-2	76	0	0	0	0	0	188	76	0	264
SSK-4	63	0	0	0	0	0	130	63	0	193
1 鉄心み	3956	0	0	0	0	0	2214	3956	0	6170
鹿澤1	103	0	0	0	0	0	955	103	0	1058
鹿澤2	0	0	0	0	0	0	385	0	0	385
鹿澤3	0	0	0	0	0	0	169	0	0	169
Pit+集合	232	15	0	0	0	0	2368	217	0	2585
合計	5385	1015	0	0	0	0	8239	8400	0	14639

物の組成から溶解炉と鹿澤とが見られ本遺構群内で溶解作業を行っていた可能性が推測できる。

鋳型種類は、銅5385g、容器1015g、不明8239gを計量し、全体量はやや少ないが鋳型の組み合わせは第1鋳造遺構と類似していると捉えられる。

土器は1～7である。1・2は常滑系の片口鉢で1は第3号鹿澤から検出した。また、2は第2鋳造遺構群を覆う堆積層を切り込んで造られたピット内より出土した。3・4は在地の片口鉢である。3は第22号清跡出土遺物と接合した。5・6も在地の甕である。6は第90号土壌の北側Pit内から検出した。7は龍泉窯系の青磁甕である。

羽口は8・9である。羽口は粘土を素材として造られ、形態は円筒形をした大口径と考えられる。内面は赤褐色で撫で整形されている。8は推定直径9.3cmである。先端は断面三角状に尖り、外面

